

日蓮大聖人御書全集

おんこうききがき

御講聞書

新版
1120
〜
1181

おんこうききがき

御講聞書

こうあん がんねん さんがつ じゅうくにち

れんれん

おんこう

どうさんねん ごとがつ

弘安元年三月十九日より連々の御講、同三年五月

にじゅうはちにち いた

二十八日に至るなり。よつて、これを記し畢わんぬ。

しる お

にこう

しる

日向これを記す。

ほけきよう もう

いっさいしゅじようかいじようぶつどう

ようほう

およそ法華経と申すは、「一切衆生皆成仏道」の要法

だいかくせそん

せつじみしこ

せつじ

いた

なり。されば、大覚世尊は「説時未至故（説時のいまだ至ら

ゆえ

と

たま

と

じせつ

待

たま

ざるが故に」と説かせ給いて、説くべき時節をまたせ給い

れい

ほととぎす

はる

送

にわとり

あかつき

ま

な

き。例せば、郭公の春をおくり鶏鳥の暁を待つて鳴くが

すなわ とき ま ゆえ

ねはんぎよう

ごときなり。これ則ち時を待つが故なり。されば、涅槃経

い とき し ゆえ だいほつし な と

に云わく「時を知るをもつての故に、大法師と名づく」と説

いま まつぼう なんみようほうれんげきよう しちじ ひろ

かれたり。今、末法は、南無妙法蓮華経の七字を弘めて、

りしよう とくやく とき だいもく よじ まじ

利生・得益あるべき時なり。されば、この題目には余事を交

ひがごと みようほう だいまんだら み たも ところ

えば僻事なるべし。この妙法の大曼荼羅を身に持ち、心に

ねん くち とな たてまつ とき いちぶ

念じ、口に唱え奉るべき時なり。これによつて、一部

にじゆうはつぽん ちようじよう なんみようほうれんげきようほんだいいち だい

二十八品の頂上に「南無妙法蓮華経序品第一」と題した

り。

みようほうれんげきようほんだいいち こと

一、「妙法蓮華経序品第一」の事

げんしでん い いっさいききょう そうよう い みようほう
「玄師伝に云わく『一切経の総要とは、謂わく妙法

れんげききょう ごじ い いちぎきょういっさいききょう
蓮華経の五字なり。』また云わく『一行一切行にして、

つねにこの三昧を修す。』云うところの『三昧』とは、即ち
さんまい しゆ い さんまい すなわ

法華の有相・無相の二行なり。この道理をもつて法華経を
ほっけ うそく むそく にぎきょう どうり ほけききょう
法華の有相・無相の二行なり。この道理をもつて法華経を

読誦せん行者は、即ち法具の一心三観なり」云々。
どくじゆ ぎきょうじゃ すなわ ほうぐく いっしんさんがん うんぬん
読誦せん行者は、即ち法具の一心三観なり」云々。

この釈に「一切経」と云うは、近くは華嚴・阿含・
しゃく いっさいききょう い ちか げごん あごん
この釈に「一切経」と云うは、近くは華嚴・阿含・

方等・般若等なり。遠くは大通仏より已來の諸経なり。本門
ほうどう はんによとう とお だいつうぶつ このかた しょききょう ほんもん
方等・般若等なり。遠くは大通仏より已來の諸経なり。本門

の意は、寿量品を除いてその外の一切経なり。「総要」
こころ じゆりようほん のぞ ほか いっさいききょう そうよう
の意は、寿量品を除いてその外の一切経なり。「総要」

とは、天には日月、地には大王、人には神・眼目のごと
てん にちがつ ち だいおう ひと たましい がんもく
とは、天には日月、地には大王、人には神・眼目のごと

ところ

しやく

すなわ

みようほうれんげきよう

くなりという意をもつて釈せり。これ即ち妙法蓮華經

しよう

いちぎよう

みようほう

いちぎよう

いつさいぎよう

おさ

の枝葉なり。「一行」とは、妙法の一行に一切行を納め

ほうぐ

だいまく

ごじ

ばんぼう

ぐそく

たり。「法具」とは、題目の五字に万法を具足すということ

なり。

さんぜじつぼう

しよぶつ

じようぎようぼさつとう

しかるあいだ、三世十方の諸仏も、上行菩薩等も、

だいぼんでんのう

たいしやく

しおう

じゅうらせつによ

てんしやうだいじん

はちまんたいぼさつ

大梵天王・帝釈・四王・十羅刹女、天照太神・八幡大菩薩・

さんのうにじゆういちしや

ほかにほんこくじゆう

しやうじん

だいじんとう

きやう

山王二十一社その外日本国中の小神・大神等、この經の

ぎようじや

しゆゝ

ほけきやう

だいが

まき

ふんみやう

と

行者を守護すべしと法華經の第五の卷に分明に説かれた

かげ み

おと

ひび

ほけきやうにじゆうはつぽん

かげ

り。影と身と、音と響きとのごとし。法華經二十八品は、影

のごとく、響ひびきのごとし。題目だいもくの五字ごじは、体たいのごとく、音おとの

ごとくなり。題目だいもくを唱となえ奉たてまつる音こえは、十方じつぼう世界せかいにとずかず

という処ところなし。我われらが小音しょうおんなれども、題目だいもくの大音だいおんに入れ

て唱となえ奉たてまつるあいだ、一大いちだい三千さんぜん界かいにいたらざる処ところなし。譬たと

えば、小音しょうおんなれども貝ばいに入れて吹ふく時とき、遠とおく響ひびくがごとく、

手ての音おとはわずかなれども鼓つづみを打うつに遠とおく響ひびくがごとし。

一念いちねん三千さんぜんの大事だいじの法門ほうもんこれなり。かかおんきようるめでたき御経おんきようにて

わたらせ給たまえるを、謗そしる人ひと何なんぞ無間むけんに墮だざい在ざいせざらん。法然ほうねん・

弘法等こうぼうとうの大悪知識だいあくちしきこれなり云々うんぬん。

いち みようほう

一、妙法

みようほう

にじ

いつさいしゆじよう

しきしん

にほう

いちだい

「妙法」の二字は、一切衆生の色心の二法なり。一代

せつきよう

なか

ほう

じ

うえ

みよう

じ

お

きよう

説教の中に「法」の字の上に「妙」の字を置きたる経は

いつきよう

ねはんぎよう

だいまく

だいねはんぎよう

い

だい

一経もなし。涅槃経の題目にも「大涅槃経」と云つて、「大」

じ

みよう

じ

しやくせんだいいち

い

の字あれども、「妙」の字なし。ただし、釈籤第一に云わ

だい

みよう

い

く「大」は、ただこれ『妙』なるのみ」と云えり。しか

だい

みよう

ふどう

おな

だい

れども、「大」と「妙」とは不同なり。同じ「大」なれど

けこんぎよう

だいほうこうぶつけこんぎよう

い

だいがう

だい

も、華嚴経の「大方広仏華嚴経」と云える題号の「大」と、

ねはんぎよう

だい

てんちうんदै

けこんぎよう

だい

むとくどう

涅槃経の「大」と、天地雲泥なり。華嚴経の「大」は無得道

の「大」なり。だい涅槃經の「大」は法華と同じく醍醐味の「大」ねはんぎよう

なり。しかれども、「しかも涅槃なお劣る」と云う時は、だいごみ

法華經には劣れり。このことは、涅槃經に分明に「法華經ほけきよう

に劣る」と説かれたり。涅槃經に云わく「法華の中の八千のおと

声聞の記別を受くることを得て大果実を成ずるがごとし。しょうもん

秋収冬蔵して、さらに所作無きがごとし」云々。この文、しゅうしゅうとうぞう

分明に我と法華經に劣れりと説かせ給えり云々。ふんみよう

一、蓮華れんげ

「蓮華」とは、本因本果なり。この本因本果というは、れんげ

いちねんさんぜん

一念三千なり。本有の因、本有の果なり。今始めたる因果に

ほんぬ いん

ほんぬ

か

いまはじ

いんが

ごひやくじんてん

ほうもん

と

あらざるなり。五百塵点の法門とは、このことを説かれた

ほんいん いん

げしゆ だいもく

ほんが

か

り。本因の因というのは、下種の題目なり。本果の果とは、

じようぶつ

いん

しんじんりようのう

きよう

成仏なり。因というのは、信心領納のことなり。この経を

たも たてまつ

とき

ほんいん

ほんいん

じようぶつ

い

持ち奉る時を、本因とす。その本因のまま成仏なりと云

ほんが

い

にちれん

でしだんな

かんよう

ほんが

うを、本果とは云うなり。日蓮が弟子檀那の肝要は、本果よ

ほんいん

しゆう

ほんいん

ほんがあ

り本因を宗とするなり。本因なくしては、本果有るべから

ほんいん

え

いん

みようじそく

くらい

ほんが

ず。よって、本因は、慧の因にして名字即の位なり。本果

か

くきようそく

くらい

くきようそく

くしきほんがく

いみよう

は、果にして究竟即の位なり。究竟即とは、九識本覚の異名

くしきほんぽう みやこ ほっけ ぎょうじゃ じゅうしよ じんりきほん

なり。九識本法の都とは、法華の行者の住所なり。神力品

い にやくせんごくこうや さんごくこうや と

に云わく「若山谷曠野（もしは山谷曠野にても）」等と説け

そくぜ どうじよう すなわ どうじよう み

り。「即是道場（即ちこれ道場なり）」と見えたり。あに、

ほっけ ぎょうじゃ じゅうしよ しょうじよ とくどう てんぽうりん にゅうねはん しょぶつ

法華の行者の住所は、生処・得道・転法輪・入涅槃の諸仏

ししよ どうじよう うんぬん

の四処の道場にあらずや云々。

いち ほんいんほんが こと

一、本因本果の事

ほうかい じようじゆうふめつ ていたらく い

法界ことごとく常住不滅の為体を云うなり。されば、

みようらくだいし しゃく とき ぐけつ い まさ し

妙楽大師このことを釈する時、弘決に云わく「当に知るべ

しんど いちねん さんぜん ゆえ じようどう とき

し、身土は一念の三千なり。故に、成道の時、この本理に

かな いっしんいちねんほうかい あまね うんぬん しゃく ふんみよう ほんいん

称つて、一身一念法界に遍し」云々。この釈、分明に本因

ほんが しゃく しん ほんが しゃく いっさいしゅじよう ど

本果を釈したり。「身」というのは、一切衆生なり。「土」

いっさいしゅじよう じゆうしよ いちねん

というのは、この一切衆生の住処なり。「一念」とは、この

しゅじよう ねんねん さごう ゆえ じようどう とき ほんり かな

衆生の念々の作業なり。「故に、成道の時、この本理に称

ほんいんほんが じようどう ほんり ほんいんほんが おな

う」とは、本因本果の成道なり。「本理」と本因本果とは同

ほうかい ごだい せん ほけきよう

じことなり。「法界」とは、五大なり。詮ずるところ、法華経

たも たてまつ ぎようじゃ にやくさいぶつぜん れんげけしよう ぶつぜん

を持ち奉る行者は、「若在仏前、蓮華化生（もし仏前に

あ れんげ けしよう しょうしほんり ほんり

在らば、蓮華に化生せん）なれば、「称此本理（この本理に

かな じようどう ほんり かな みようほうれんげきよう ほんり

称う）の成道なり。「本理に称う」とは、妙法蓮華経の本理

かな

ほけきよう

ほんり

かな

きよう

に称うということなり。法華經の本理に称うとは、この經

たも

たてまつ

い

にやくうのうじ

そくじぶっしん

よ

を持ち奉るを云うなり。「若有能持 則持仏身（もし能く

たも

すなわ

ぶっしん

たも

持つことあらば、則ち仏身を持つ」とは、これなり。

いち

にぜんむとくどう

こと

一、爾前無得道の事

ほうもん

れんげ

にじ

お

ゆえ

この法門は、「蓮華」の二字より起これり。その故は、

れんげ

にじ

い

ゆえ

さんぜ

しよぶつ

「蓮華」の二字をもつて云うなり。その故は、三世の諸仏の

じようどう

とな

れんげ

にじ

い

ごんきよう

成道を唱うるは「蓮華」の二字より出でたり。権教にお

れんげ

さたな

あ

い

うみようむじつ

いて「蓮華」の沙汰無し。もし有りと云うとも、有名無実の

れんげ

さんぜ

しよぶつ

ほんじ

げしゆ

さ

け

「蓮華」なるべし。三世の諸仏の本時の下種を指して「華」

と名づけ、この下種の「華」によりて成仏の「蓮」を取る。

みようほうれんげすなわ げしゆ げしゆすなわ なんみようほうれんげきよう

妙法蓮華即ち下種なり。下種即ち南無妙法蓮華經なり。

け ほんいん れん ほんが け ほんいん ふしんほうぼう

「華」は本因、「蓮」は本果なれば、「華」の本因を不信謗法

ひと ぐそく きよう い ひとしん

の人あに具足せんや。經に云わく「もし人信ぜずして、こ

きよう きぼう すなわ いっさいせけん ぶっしゆ だん うんぬん

の經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん」云々。

れんげ まよ ゆえ じっかいぐそくな じっかいぐそく

この「蓮華」に迷うが故に、十界具足無し。十界具足せざ

いちねんさんぜんあとかたな いっさい ほうもん れんげ にじ

れば、一念三千跡形無きなり。一切の法門は、「蓮華」の二字

お いちだいせつきよう むとくどう い れんげ

より起これり。一代説教において無得道と云うも、「蓮華」

にじ お ふか あん うんぬん

の二字より起これり。深くこれを案ずべし云々。

いち じよほん こと

一、「序品」の事

きようしゆしやくそん ほけきよう と たま

このことは、教主釈尊、法華經を説き給わんとて、

まず瑞相の顯れたることを云うなり。今、末法に入つて

なんみようほうれんげきよう あらわ たも がいそう いか まっぽう い

南無妙法蓮華經の顯れ給うべき瑞相は、彼には百千万倍

すぐ 勝るべきなり。その故は、雨は竜の大小により、蓮華は池

せんじん したが いろふどう うんぬん

の浅深に随つて、その色不同なるがごとくなるべし云々。

いち ほん い こと

一、「品」と云う事

ほん しゃく い ぎるいどう い ほけきよう

「品」とは、釈に云わく「義類同」と云えり。この法華經

さんぶつよ あ たま じようはん たま さんぶつ しゃか

は三仏寄り合い給いて定判し給えり。「三仏」とは、釈迦・

たほう ふんじん

さんぶつ ひようじよう

多宝・分身これなり。この三仏、評定してのたまわく

いっさいしゆじようかいじようぶつどう

ほけきよう かぎ あ

かい

『一切衆生皆成仏道』は、法華經に限って有り」と。皆

ぜしんじつ みな

しんじつ

しようみよう

ぜつそうぼんでん

じようしよう

是真実（皆これ真実なり）の証明、「舌相梵天」の誠証、

ようとうせつしんじつ

かなら

まさ

しんじつ

と

きんげん

「要当説真実（要ず当に真実を説くべし）」の金言、これ

ぎるいどう

だい

ほん

じ

てんじく

ばっこ

らを義類同して題したる「品」の字なり。天竺には「跋渠」

い

ほん

い

しゃか

たほう

ふんじん

さんぶつ

と云う。ここには「品」と云えり。釈迦・多宝・分身の三仏

おんくち

さ あ

どうおん

じようばん

たま

われ

の御口をもつて指し合わせ、同音に定判し給える我ら

しめじよう じようぶつ

たと

とり

たまご

うち

たまご

突

とき

衆生の成仏なり。譬えば、鳥の卵の内より卵をつつく時、

はは

おな

開

おな

ところ

母また同じくつつきあくるに、同じき所をつつきあくるが

すなわ ねんりよ かんろう ゆえ いま ほけきよう
ごとし。これ即ち念慮の感応するが故なり。今、法華經の

じようぶつ

さんぜしよぶつ

どうおんどうじ

さだ たま

成仏もかくのごとくなり。三世諸仏の同音同時に定め給え

じようぶつ

ゆえ

きよう

い

じゆうぶつくしよう

によじゆうぶつく

る成仏なり。故に、經に云わく「從仏口生」「如從仏口」

とううんぬん

等云々。

によぜがもん

われき

こと

一、「如是我聞（かくのごときを我聞きき）」の事

おお

によ

しゆじよう

によ

ほとけ

によ

仰せに云わく、「如」というは、「衆生の如と仏の如と、

いちによ

にによな

きゆうかい

ぶっかい

一如にして二如無し」なり。しかりといえども、九界と仏界

わ

ぜ

い

によ

によ

ふい

と分かれたるを「是」と云うなり。「如」とは、『如』は不異

な

すなわ

くう

ぎ

しやく

すこ

異

に名づく。即ち空の義なり」と釈して、少しもことなら

ざるを云うなり。い詮せんずるところ、法華經の意は、煩惱即ぼんのうそく

ぼだい しょうじそくねはん しょうぶつふに めいごいったい

菩提・生死即涅槃・生仏不二・迷悟一体といえり。これを

によ「如」とは云うなり。いされば、「如」は実相、「是」は諸法なしよほう

り。また「如」は心法、「是」は色法、「如」は寂、「是」

しょう しょう じんぼう ぜ しくほう によ じゃく ぜ

は照なり。「如」は一念、「是」は三千なり。今經の心は、

もんもんくく いちねんさんぜん ほうもん そう によぜがもん しじ

文々句々、一念三千の法門なり。総じて「如是我聞」の四字

より外は今經の体全く無きなり。「如」と妙とは同じき

ことなり、「是」と法とはまた同じきことなり。法華經と

釈尊と我らとの三つ全く不同無く「如我等無異（我がご

じやくそん われ みつ まった ふどうな によがとうむい わ

積尊と我らとの三つ全く不同無く「如我等無異（我がご

じやくそん われ みつ まった ふどうな によがとうむい わ

積尊と我らとの三つ全く不同無く「如我等無異（我がご

じやくそん われ みつ まった ふどうな によがとうむい わ

積尊と我らとの三つ全く不同無く「如我等無異（我がご

ひと こと
とく等しくして異なることなし」なるを、「如」と云うなり。
ほとけ さと ぼんぷ まよ
り。仏は悟り、凡夫は迷いなりというを、「是」とは云うなり。

がもん が あなん もん
「我聞」というは、「我」は阿難なり。「聞」とは、「耳の

しゅ しやく もん
主」と釈せり。「聞」とは、名字即なり。「如是」の二字は、

みようほう あなん はじ
妙法なり。阿難を始めとして靈山一会の聴衆、同時に

みようほうれんげきよう ごじ ちようもん
妙法蓮華經の五字を聴聞せり。よつて、我も聞くと云え

り。されば、相伝の点には「如は是なりきと我聞く」とい

えり。詮ずるところ、末法当今には南無妙法蓮華經を我も聞

二二二

が

しんによほつしろう

が

てんだいだいし

くと心得べきなり。「我」は、真如法性の我なり。天台大師

どうもんしゆ

ほん

おな

き しゆ

どう

は「同聞衆」と判ぜり。同じことを聞く衆というなり。「同」

みようほうれんげきよう

もん

そくしんじようぶつ

ほけきよう

とは、妙法蓮華経なり。「聞」とは、即身成仏は法華経に

かぎ

き

うんぬん

限ると聞くことなり云々。

いち

によぜ

にじ

一、「如是」の二字

によぜ

にじ

やつきよう

もと

しやく

とき

もんぐ

いち

い

「如是」の二字を約教の下に釈する時、文句の一に云

いちじ

よつ

やと

ち

お

わく「また一時に四つの箭を接つて地に墮ちしめざるも、

はや

しろう

どんろ

むち

はべつ

か

いまだあえて捷しと称せず。鈍驢に策うち、跛鼈を駆るも、

ひと

え

よつ

うんぬん

き

なおし一つをも得ず。いかにいわんや四つをや」云々。記の

いち い だいきよう

一に云わく「大経に云わく、迦葉菩薩問うて云わく『いか

かしようぼさつと い

ちしや ねんねん めつ かん

んが智者は念々の滅を觀ず』。仏言わく『譬えば、四人皆

ほとけのたま たと

しやじゆつ よ

いつしよ あつ

おのおのいっぽう

い

ねんごろ

射術を善くす。一処に聚まつて、各一方を射るに念言す

われ

よつ

や

い

お

らく、我らの四つの箭はともに射ればともに墮ちんと。ま

ひとあ

ねん

お

およ

われよ

た人有つて念ずらく、そのいまだ墮ちざるに及んで、我能く

いちじ

て

せつしゆ

ほとけのたま

一時に手をもつて接取せんというがごとし』。仏言わく

しょうしつき

ひと

はや

ひぎようき

『捷疾鬼は、またこの人よりも速し。かくのごとく飛行鬼・

してんのう

にちがつじん

けんしつてん

てんでん

や

はや

むじよう

四天王・日月神・堅疾天は展転して箭よりも疾し。無常は

す

これに過ぎたり』と。

ほんまつ ところ たし きよう によぜ しやく

この本末の意は、他師この経の「如是」について釈

もう

を設くといえども、さらに法華経の理に深く叶わざるなり。

いち に ぎり っつ はんねん

一・二だにも義理を尽くさざるなり。いわんや因縁をや。

やつきよう かんじん よつ は たま

いかにいわんや約教・観心の四つをやと破し給えり。

せん ほけきよう そくしつとんじよう もと

詮ずるところ、法華経は速疾頓成をもつて本とす。我

しゆじよう むじよう しようしつき

ら衆生の無常のはやきことは捷疾鬼よりもはやし。ここを

い いき い いき ま

もつて、出ずる息は入る息を待たず。

きよう によぜ にぜん しよきよう によぜ すぐ

この経の「如是」は爾前の諸経の「如是」に勝れて

ちようはち によぜ ちようはちだいご によぜ そくしつとんじよう ゆえ

超人の如是なり。超人醍醐の如是とは、速疾頓成の故な

みようらくだいしい

ちようはち

によぜ

り。ここをもつて、妙楽大師云わく「もし超人の如是にあ

きよう しよもん

うんぬん

らずんば、いずくんぞこの経の所聞となさん」云々。

いち ぎしやくつせん こと

一、「耆闍崛山」の事

おお い ぎしやくつせん

りようじゆせん

りよう

仰せに云わく、「耆闍崛山」とは、「霊鷲山」なり。「霊」

さんぜ しよぶつ しんぼう

かなら

やま ぶつぼう

とど たも

とは、三世の諸仏の心法なり。必ずこの山に仏法を留め給

じゆ とり

やま みなみ あ

しだりん

う。「鷲」とは、鳥なり。この山の南に当たつて尸陀林と

はやし しびと す

ところ

わし

しかばね

と く

いう林あり。死人を捨つる所なり。鷲、この屍を取り食

やま す

りようじゆせん

い

らつて、この山に住むなり。さて「霊鷲山」とは云うなり。

せん いま きよう こころ めいごいったい

だん

りよう

詮ずるところ、今の経の心は迷悟一体と談ず。「霊」

ほげきよう

さんぜ

しよぶつ

しんぼう

さど

というは、法華経なり。三世の諸仏の心法にして悟りなり。

じゆ

ちくしやう

まよ

めいごふに

ひら

「驚」というは、畜生にして迷いなり。迷悟不二と開く

ちゆうどうそくほつしやう

やま

ぎしやくつせんちゆう

ぎしやくつせん

なか

中道即法性の山なり。「耆闍崛山中（耆闍崛山の中）」と

めいごふに

さんたいいったい

ちゆうどうだいいちぎくう

ないしやう

いうは、迷悟不二、三諦一諦、中道第一義空の内証なり。

ほげきよう

ぎよう

にちれん

でしだんなとう

じゆうしよ

されば、法華経を行ずる日蓮が弟子檀那等の住所は、い

さんや

りようじゆせん

ぎようじや

しやか

かなる山野なりとも、「霊鷲山」なり。行者、あに「釈迦

によらい

にほんこく

ぎしやくつせん

にちれんら

たぐ

如来」にあらずや。日本国は「耆闍崛山」、日蓮等の類いは

しやかによらい

そう

いちじようなんみようほうれんげきやう

「釈迦如来」なるべし。総じて、一乘南無妙法蓮華経を

しゆぎやう

ところ

ところ

じようじやつこう

みやこ

修行せん所は、いかなる所なりとも、常寂光の都

りようじゆせん

「靈鷲山」なるべし。

ぎしやくつせんちゆう

この「耆闍崛山中」とは、煩惱の山なり。仏菩薩等は、

ぼんのう

やま

ぶつぼさつとう

ぼだい

か

ぼんのう

やま

なか

ほけきよう

さんぜ

しよぶつと

菩提の果なり。煩惱の山の中に於て、法華經を三世の諸仏説

たま

しよぶつ

ほつしよ

えじ

しゆじよう

むみよう

えじ

き給えり。諸仏は法性の依地、衆生は無明の依地なり。

やま

じゆりようほん

ほんぬ

りようぜん

と

ほんぬ

この山を寿量品にしては本有の靈山と説かれたり。本有

りようぜん

しやばせかい

なか

にほんこく

ほけきよう

の靈山とは、この娑婆世界なり。中にも日本国なり。法華經

ほんこくどみよう

しやばせかい

ほんもんじゆりようほん

みぞう

の本国土妙は、娑婆世界なり。本門寿量品の未曾有の

だいまんだらこんりゆう

ざいしよ

うんぬん

ゆがろん

い

とうほう

大曼荼羅建立の在所なり云々。瑜伽論に云わく「東方に

しよこくあ

なか

だいじよう

しゆしよ

あ

だいじよう

小国有り。その中に、ただ大乘の種姓のみ有り」。「大乘

しゆしやう

ほけきやう

ほけきやう

げしゆ

じやうぶつ

の種姓」とは、法華経なり。法華経を下種として成仏す

なんみやうほうれんげきやう

しやうこく

べしということなり。いわゆる南無妙法蓮華経なり。「小国」

にほんこく

うんぬん

とは日本国なり云々。

いち よだいびくしゆ だいびくしゆ

こと

一、「与大比丘衆（大比丘衆と）」の事

おお

い

もんぐ

いち

い

しやくろん

あ

だい

仰せに云わく、文句の一に云わく「釈論に明かすに『大

た

しやう

ないげ

きやうしよ

とは、また多と言ひ、また勝と言ひ。あまねく内外の経書

し

ゆえ

た

すういちまんにせん

いた

ゆえ

た

を知るが故に、多と言ひ。また数一万二千に至るが故に、多

い

いま

あ

だいでうあ

ゆえ

だいでうあ

ゆえ

と言ひ。』今、明かすに、大道有るが故に、大用有るが故に、

だい

ち

あ

ゆえ

だい

い

しやう

どうすぐ

大知有るが故に、故に『大』と言ひ。『勝』とは、道勝れ、

ゆうすぐ

ちすぐ

ゆえ

しょう

い

た

どうおお

用勝れ、知勝るるが故に『勝』と言う。『多』とは、道多く、

ゆうおお

ちおお

ゆえ

た

い

い

い

ごんよう

用多く、知多きが故に『多』と言う。また云わく「含容し

いっしんいっさいしん

ゆえ

た

な

て、一心一切心なり。故に『多』と名づくるなり。」

き いち い

いっしんいっさいしん

い

しん

きよう

記の一に云わく『一心一切心』と言うは、心・境と

ごころ

おのおのいっさい

おさ

いっさい

さんぜん

い

もに心にして、各一切を摂む。一切は三千を出でざるが

ゆえ

しかん

だいご

もん

えんしん

故なり。つぶさには止観の第五の文のごとし。もし円心に

さんぜん

おさ

ゆえ

さんぜん

そうべつ

あらずんば、三千を摂めず。故に、三千は総別ことごとく

くう

け ちゆう

いちもんすで

た

みな

じゆん

空・仮・中なり。一文既にしかり。他は皆これに準ぜよ。」

ほんまつ

ごころ

しん

きよう

ぎ

いちねんさんぜん

しやく

この本末の意は、心・境の義の一念三千を積するな

しかん だいご もん そ いっしん じつぼうかい ぐ ないし
り。止観の第五の文とは、「夫れ、一心に十法界を具す乃至

ふかしぎさきよう もん さ しん きよう ぎ いちねんさんぜん
不可思議境となす」の文を指すなり。心・境の義の一念三千

よだいびくしゆ だい じ しゃく い
とは、この「与大比丘衆」の「大」の字より釈し出だせり。

だいたししよう さんじ さんたい さんがん えんどん ぎようじゃ きねん
「大多勝」の三字は、三諦・三観なり。円頓の行者の起念

とうたい さんたい さんがん だいたししよう しゃく そう
の当体は、三諦・三観にして「大多勝」なり。この釈に「総」

いっしん べつ さんぜん いちもん
というは、一心のことなり。「別」とは、三千なり。「一文」

だい いちじ
とは、「大」の一字なり。

いま まつぼう い ほけきよう ぎようじゃ にちれんら たぐ
今、末法に入つては、法華經の行者、日蓮等の類い、

まさ だいたししよう しゆぎよう ほけきよう ぎようじゃ しゃかによらい
正しく「大多勝」の修行なり。法華經の行者をば、釈迦如来

はじ たてまつ

だいにん

うやま

たてまつ

を始め奉り、ことごとく大人となして敬い奉るなり。

まこと

だいまんだら

どうぐ

びくしゆ

ほんもん

じ

いちねん

誠にもつて大曼荼羅の同共の比丘衆なり。本門の事の一念

さんぜん

なんみようほうれんげきよう

だいたしよう

びくしゆ

もんもんくく

三千・南無妙法蓮華經の「大多勝」の比丘衆なり。文々句々

ろくまんくせんさんびやくはちじゅうしじ

じ

だいたしよう

にんぼういったい

六万九千三百八十四字の字ごとに「大多勝」なり。人法一体

そくしんじようぶつ

にして、即身成仏なり。

しやくく

い

だい

くう

ぎ

た

されば、釈に云わく『大』はこれ空の義、『多』はこ

け ぎ

ししよう

ちゆう

ぎ

いちにん

うえ

だいたしよう

れ仮の義、『勝』はこれ中の義なり。一人の上にも「大多勝」

さんぎ

ふんみよう

ぐそく

だい

しやくもん

た

ほんもん

の三義、分明に具足す。「大」とは迹門、「多」とは本門、

ししよう

だいまく

ほけきよう

ほんぞん

だいたしよう

だいまんだら

「勝」とは題目なり。法華經の本尊は、「大多勝」の大曼荼羅

よだいびくしゆ

にかいはちばん ぞうしゆ

なり。これあに「与大比丘衆」にあらずや。二界八番の雜衆、

ほっけ

えぎ

だいまんだら

ほけきよう

ぎようじや

ことごとく法華の会座の大曼荼羅なり。法華經の行者は、

にほう

じよう

す

みようほう

しん

だい

二法の情を捨ててただ妙法と信ずるを、「大」といふなり。

だيمोक

いっしん

いっさいしん

ごんよう

た

い

この題目の一心に一切心を含容するを、「多」と云ふなり。

しよきよう

しよにん

すぐ

ゆえ

しよう

い

いっさいしん

諸經・諸人に勝れたるが故に、「勝」と云ふなり。一切心

ほうかい

つ

いっしん

ほけきよう

しんじん

しんじんすなわ

に法界を尽くす。一心とは、法華經の信心なり。信心即ち

いちねんさんぜん

うんぬん

一念三千なり云々。

いち

に じ せそん

とき

せそん

こと

一、「爾時世尊（その時、世尊は）」の事

おほ

い

せそん

しやかによらい

せん

仰せに云わく、「世尊」とは、釈迦如来なり。詮ずると

せそん ころ、世尊とは、孝養こうようの人を云うなり。その故は、不孝ふこうの人

せそん

い

きようしゆしやくそん

せそん

もと

おわ

をば世尊とは云わず。教主釈尊こそ世尊の本にては御坐

そちら

ちちじようぼんおう

ははま やぶにん

じようどう

たま

しまし候え。父浄飯王・母摩耶夫人を成道せしめ給えり。

こんきよう

ざ

ふぼ おわ

ほうべんど

されば、今経の座には父母御坐しまさざれば、方便土へ

ほけきよう

おく

たま

か

ど き

え

法華経をば送らせ給いたり。「彼の土に聞くことを得ん」と

ほけきよう

こころ

じつぽうぶつ どちらゆう

は、これなり。ただし、法華経の心は「十方仏土中

ゆいういちじようほう

じつぽう

ぶつど

なか

いちじよう

ほう

あ

唯一乘法（十方の仏土の中には、ただ一乗の法のみ有り）」

とうりてん

ははま やぶにんししよう

たま

とうりてん

そく

なり。忉利天には母摩耶夫人生じ給えり。忉利天に即した

じやつこうど

ほうべんど

そく

じやつこうど

しど

いちねん

る寂光土なり。方便土に即したる寂光土なり。「四土は一念

みなじょうじやつこう

ほけきよう

せつしよ

にして皆常寂光なり」なれば、いずれも法華經の説処な

こくうえ とき

せつほつけ

ほつけ

と

り。虚空会の時の「説法華（法華を説きたもう）」に、あに

とうりてん

じやつこうど

せつほつけ

ほうべんど

切利天もるべきや。寂光土の「説法華」に、あに方便土も

ほけきよう

せつしよ

どうもんしゆ

にんずう

るべきや。いずれも法華經の説処なれば、同聞衆の人数た

うんぬん

り云々。

いち じょうぼんおう

ま やぶにん

じょうぶつ

しやうもん

こと

一、浄飯王・摩耶夫人の成仏の証文の事

おほ い

ほうべんぼん

い

がしぎどうじよう

かんじゆやく

仰せに云わく、方便品に云わく「我始坐道場 觀樹亦

きようぎよう

われ

はじ

どうじよう

ぎ

じゆ

かん

きようぎよう

経行（我は始め道場に坐し、樹を觀じまた経行す）」

もん

じゆりやうほん

い

ねんがじつじようぶついらい

の文これなり。また寿量品に云わく「然我実成仏已来（し

われ じつ じようぶつ

このかた

もん

きようしゆ

かるに、我は実に成仏してより已来」の文これなり。教主

しやくそん

じようどう

とき

じようぼん

まや

とくどう

ほんじやくにもん

釈尊の成道の時、浄飯も摩耶も得道するなり。本迹二門

とくどう

もん

うんぬん

もん

にちれん

こしん

だいじ

の得道の文これなり云々。この文、日蓮が己心の大事なり。

がし

がじつ

もん

よ

よ

あん

「我始」と「我実」との文、能く能くこれを案ずべし。そ

ゆえ

にぜんきよう

こころ

ふ

しかくべつ

だんどう

の故は、爾前経の心は父子各別の談道なり。しかるあいだ、

じようぶつ

な

いま

きよう

とき

ふし

てんしょう

さだ

ふ

しいつたい

成仏これ無し。今の経の時、父子の天性を定め、父子一体

だん

ふぼ

じようぶつ

すなわ

こ

じようぶつ

こ

じようぶつ

と談ぜり。父母の成仏は、即ち子の成仏なり。子の成仏

すなわ

ふぼ

じようぶつ

しやくそん

がし

ぎどうじよう

とき

は、即ち父母の成仏なり。釈尊の「我始坐道場」の時、

じようぼんおう

まやぶにん

どうじ

じようどう

しやくそん

がじつじようぶつ

浄飯王・摩耶夫人も同時に成道なり。釈尊の「我実成仏」

とき じょうほんおう まやぶにんどうじ
の時、浄飯王・摩耶夫人同時なり。始・本共に同時の成道
なり。

ほうもん てんだい でんぎようとう のぞ し ひといちにん
この法門は、天台・伝教等を除いて、知る人一人もこ

あ まっぼう い にちれんら たぐ かた ひ
れ有るべからず。末法に入つて日蓮等の類い、堅く秘すべ

ほうもん たと れんげ はなみ あいはな
き法門なり。譬えば、蓮華の華菓の相離れざるがごとくな

ほけきよう ぎようじや なんによ せそん
り。しかれば、法華經の行者は男女ことごとく世尊にあら

やくおうほん い おいっさいしゅじようちゆう やくいだいいち いっさい
ずや。薬王品に云わく「於一切衆生中、亦為第一（一切

しゅじよう なか だいいち もん すなわ せ
衆生の中において、またこれ第一なり）」文。これ即ち世

そん きようもん ぜしんぶっし まこと ぶっし
尊の經文にあらずや。「是真仏子（これ真の仏子）」なれ

ほうおう みこ せそんたいいち
ば、法王の御子にして世尊第一にあらずや。

いち ほうべんぼん こと

一、「方便品」の事

みようほうれんげきよう ごじ じつしよう

妙法蓮華経の五字とは、名・体・宗・用・教の五重

げんぎ しかん じつしよう しゃく じつしよう

玄義なり。されば、止観に十章を釈せり。この十章は、

すなわ みようほうれんげきよう のうしゃく しゃくみよう みようげんぎ

即ち妙法蓮華経の能釈なり。それとは、釈名は名玄義

なり。体相・摂法の二つは体玄義なり。偏円の二つは教玄

ぎ ほうべん しょうがん かほう みつ しゅうげんぎ ききよう

義なり。方便・正観・果報の三つは宗玄義なり。起教の

ひと ゆうげんぎ はじ たいい しょう お しき ふた

一つは用玄義なり。始めの大意の章と終わりの旨歸との二

つをばこれを除く。この意は、止観一部の所詮は、大意と

のぞ ことろ しかんいちぶ しょせん たいい

つをばこれを除く。この意は、止観一部の所詮は、大意と

しき おき むみようそくみよう たいい ゆえ むみよう

旨歸とに納まれり。無明即明の大意なるが故なり。無明と

そくみよう ふんべつ しき いま みようほうれんげきよう ごじゆう

も即明とも分別せざるが旨歸なり。今、妙法蓮華經の五重

げんぎ しゆぎよう たてまつ ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん かいご

玄義を修行し奉れば、煩惱即菩提・生死即涅槃の開悟を

う たいい しき ほつけ しんじん

得るなり。大意と旨歸とは、法華の信心のことなるべし。

いしんとくにゆう しん い え ひこちぶん おの

「以信得入（信をもつて入ることを得たり）」「非己智分（己

ちぶん

が智分にあらず）」とは、これなり。

われ しゆじよう しきしん にほう みようほう にじ むし

我ら衆生の色心の二法は、妙法の二字なり。「無始の

しきしん もと りしろう みようきよう みようち かいかく

色心は、本よりこれ理性にして、妙境・妙智なり」と開覚

たいい い たい しきほう とく い しんぼう とく

するを、大意とは云うなり。大は色法の徳、意は心法の徳な

り。大たいの字じは形かたちに訓くんぜり。今いま、日蓮等にちれんらの類たぐい、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ なんによ きせんとう しきしん ほんぬ

南無妙法蓮華経と唱え奉る男女・貴賤等の色心は、本有の

みようきよう みようち ふぼかばく にくしん ほか べつ さんじゆうにそう

妙境・妙智なり。父母果縛の肉身の外に、別に三十二相

はちじつしゆこう そうごう な そくしんじようぶつ

八十種好の相好これ無し。即身成仏これなり。しかるあい

たい いちじ ほうかい おさ ゆえ ほけきよう

だ、大の一字に法界をことごとく収むるが故に、法華経を

だいじよう い いっさい ぶつ ぼさつ しょうしゆ にん ちく じごくとう

大乘と云うなり。一切の仏・菩薩・聖衆・人・畜・地獄等

しゆじよう ちえ ぐそく たも ゆえ ぶつ い だいじよう

の衆生の智慧を具足し給うが故に、仏意と云うなり。大乘

ぶつ い おな すなわ みようほうれんげきよう ぐとく

も仏意も同じことなり。これ即ち妙法蓮華経の具徳なり。

きゆうかい しゆじよう こころ ほとけ こころ いっさいきよう

されば、九界の衆生の意をもつて仏の意とす。一切経

こころ

ほけきよう

こころ

おいちぶつじようふんべつせつさん

の心をもつて法華經の意とす。「於一仏乘分別説三

いちぶつじよう

ふんべつ

さん

と

(一仏乘において分別して三を説きたもう)とは、これ

なり。

ほけきよう

ぼう

たてまつ

さんぜ

しよぶつ

かかるめでたき法華經を謗じ奉ること、三世の諸仏

おんした

き

みようほうれんげきよう

ぐ

の御舌を切るにあらずや。しかるに、この妙法蓮華經の具

とく

ほとけ

ちえ

計

徳をば、仏の智慧にてもはかりがたく、いかにいわんや

ぼさつ

ちりき

およ

だいしよう

とうちゆう

菩薩の智力に及ぶべけんや。これによつて、大聖の塔中の

げ

そうでん

い

いつけ

ほんい

いちごん

ほん

偈の相伝に云わく「一家の本意はただ一言のみをもつて本

うんぬん

いちごん

じやくしようふに

いちごん

となす」云々。この「一言」とは、寂照不二の一言なり。

ほんまつくきようとう

いちごん

い

しんじつ

ぎ

あるいは「本末究竟等」の一言とも云うなり。真実の義に

なんみようほうれんげきよう

いちごん

ほん

ほんぷ

まつ

は南無妙法蓮華経の一言なり。「本」とは凡夫なり、「末」

ほとけ

くきよう

しようぶついちによ

しようぶついちによ

によ

とは仏なり。「究竟」とは、生仏一如なり。生仏一如の如

たい

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

の体は、いわゆる南無妙法蓮華経これなり云々。

いち ぶつしよじようじゆ

だいいちけうなんげしほう

ゆいぶつよぶつ

ほとけ

じようじゆ

一、「仏所成就、第一希有難解之法。唯仏与仏（仏の成就

だいいちけうなんげ

ほう

ほとけ

ほとけ

したまえるところは、第一希有難解の法なり。ただ仏と仏

こと

とのみ」の事

おほ

い

ぶつ

しやくそん

おんこと

じようじゆ

仰せに云わく、「仏」とは、釈尊の御事なり。「成就」

ほげきよう

だいいち

にぜん

ふだいいち

たい

けう

とは、法華経なり。「第一」は爾前の不第一に対し、「希有」

は爾前にぜんの不希有ふけうに対し、たい「難解之法」なんげしほうは爾前にぜんの不難解ふなんげに対し

たり。この「仏」と申すは、諸法実相じつがいなれば、十界の衆生じつがいを

「仏」とは云うなり。十界の衆生の語言音声ぶつは、「成就」

にして法華經なり。三世の諸仏ほけきようの出世の本懐さんぜの妙法しよぶつにして、

優曇華の妙文うどんげなれば、「第一希有みようもん」なり。九界の智慧だいいちけうの及

ばざれば、「難解法」なり。「成就」とは、我ら衆生の煩惱なんげほう

即菩提・生死即涅槃そくぼだいのしようじそくねはんことなり。權教の意は終に不成ごんきよう仏な

れば、成就にはあらず。迹門じようじゆには二乗成仏しやくもん顕れたり。

これ即ち成就なり。これを「仏所成就」とは説ぶつしよじようじゆかれたり。

されば、「唯仏」とは釈迦、「与仏」とは多宝なり。多宝

ゆげん

涌現なければ、「与仏」とは云いがたし。しかりといえども、

つい しゅつげん

ゆえ

よぶつ

たほう

せん

終には出現あるべき故に、「与仏」を多宝というなり。詮ず

にちれんら

たぐ

こころ

ゆいぶつ

しやくそん

よぶつ

るところ、日蓮等の類いの心は、「唯仏」は釈尊、「与仏」

にちれんら

たぐ

ゆえ

ゆいぶつ

ゆい

は日蓮等の類いのことなるべし。その故は、「唯仏」の「唯」

かさ

ひゆほん

ゆいがいちにん

われいちにん

と

を、重ねて譬喩品には「唯我一人（ただ我一人のみ）」と説

よぶつ

にじ

かさ

ほうべんぼん

まつ

いた

にやくぐ

けり。「与仏」の二字を、重ねて方便品の末に至つて「若遇

よぶつ

よぶつ

あ

と

しやく

ふか

えんり

余仏（もし余仏に遇わば）」と説けり。釈には「深く円理を

さごと

な

ほとけ

しやく

すなわ

覚る。これを名づけて仏となす」と釈せり。これ即ち、

よぶつ

い

ほけきよう

ぎようじや

なんによ

ゆいが

「与仏」と云うは、法華經の行者の男女のことなり。「唯我

いちにん

しやくそん

くみ

ほとけ

にぶつ 寄

あ

一人」の釈尊に与したてまつる仏なり。この二仏より合つ

ないのうくじん

よ くじん

て、「乃能究尽（いまし能く究尽したまえり）」するところ

しよほうじつそう

ほつたい

じゆうによぜ

じっかい

の諸法実相の法体なり。されば、十如是というは、十界な

じっかいすなわ

じゆうによぜ

じゆうによぜ

すなわ

ほけきよう

いみよう

り。十界即ち十如是なり。十如是は、即ち法華經の異名な

うんぬん

り云々。

いち

じゆうによぜ

こと

一、十如是の事

おお

い

じゆうによぜ

ほけきよう

がんもく

いつさいきよう

仰せに云わく、この十如是は、法華經の眼目、一切經

そうよう

じゆうによぜ

かいかく

しよほう

の総要たり。されば、この十如是を開覚しぬれば、諸法に

めいごな

じつそう

ぜんじょうな

おいて迷悟無く、実相において染浄無し。これによつて

てんださいし

しかん

じつしよう

じゅうによぜ

しやくしゆつ

天台大師は、止観の十章もこの十如是より釈出せり。し

じゅうによぜ

す

ほうもん

な

かるあいだ、十如是に過ぎたる法門さらにもつてこれ無し。

かしようさず

い

じゅうだいしよう

まった

ここをもつて、和尚授けて云わく「十大章はこれ全く

じゅうによぜ

たいい

さと

とき

しようによぜ

こころ

十如是なり。もし大意を覚る時は、性如是の意をもつて、

しも

げんによ

ず

ふんべつ

じゅうによぜ

じゅうだいしよう

なら

下の玄如の図を分別すべし」。十如是を十大章に習うこと

しようによぜ

たいい

そうによぜ

しやくみよう

たいによぜ

たいそう

は、性如是は大意なり。相如是は釈名、体如是は体相、

りきによぜ

しようほう

さによぜ

へんえん

えんによぜ

ほうべん

いんによぜ

力如是は撰法、作如是は偏円、縁如是は方便、因如是は

しようがん

か

ほうによぜ

か

ほう

ほんまつくきようによぜ

しき

正観、果・報如是は果・報、本末究竟如是は旨帰なり。こ

なか ききよう しよう けた りもつ か かみ けゆう
の中に起教の章は、「化他・利物は果の上の化用なり」と云
うなり云々。
うんぬん

いち じしようむじようどう だいじようびようどうほう みずか むじようどう だいじようびようどう
一、「自証無上道 大乘平等法（自ら無上道・大乘平等
の法を証す）」の事
ほう しよう こと

おお い まっぼうとうこん だいじようびようどう ほう しよう
仰せに云わく、末法当今において大乘平等の法を証

にちれんら たぐ かぎ きようもん
せること、日蓮等の類いに限れり。されば、この経文は、

きようしゆ だいかくせそん ほけきよう ごくり しよう ばんばん しゆつせ たま
教主・大覚世尊、法華経の極理を証して、番々に出世し給

と せん じしよう
いて説きたもうなり。詮ずるところ、この「自証」という

さんじゆうじようどう とき さ ゆえ きようしゆしやくそん
は、三十成道の時を指すなり。その故は、教主釈尊は

じゆうくしゆつけ さんじゆうじようどう

じしようむじようどう

十九出家、三十成道なり。しかるあいだ、「自証無上道」

とう

等。

せん

ほん

こころ

じっかいかいじよう

むね

あ

詮ずるところ、この品の心は十界皆成の旨を明かせ

じしよう

じっかい

しよほうじっそう

いちぶつ

り。しかれば、「自証」といふは、十界を諸法実相の一仏ぞ

と

じごく

がき

むじよう

だいじよう

と説かれたり。地獄も餓鬼も、ことごとく無上の大乘の

みようほう ししようとく

じ

じっかい

さ

妙法を証得したるなり。「自」は十界を指したり。ほしい

ししよう

ごんきよう

ふびようどう

きよう

ままに証すということなり。権教は不平等の経なり、

ほけきよう

びようどう

きよう

いま

にちれんら

たぐ

しんじつ

じしよう

法華経は平等の経なり。今、日蓮等の類いは、真実、「自証

むじようどう

だいじよう びようどうほう

ぎようじゃ

無上道 大乘平等法」の行者なり。いわゆる、

なんみようほうれんげきよう だいじようびようどうほう こうせんる ふ とき うんぬん
南無妙法蓮華經の大乗平等法の広宣流布の時なり云々。

いち がし ざどうじよう かんじゆやくきようぎよう われ はじ どうじよう ざ じゆ
一、「我始坐道場 觀樹亦經行（我は始め道場に坐し、樹

を觀じまた經行す）」の事

おほ い もん きようしゆしやくそん さんじゆうじようどう とき
仰せに云わく、この文は教主釈尊、三十成道の時を

と たま かんじゆ じゆ じゆうにいんねん
説き給えり。「觀樹」の「樹」というは十二因縁のとなり。

せん じゆうにいんねん かん きようぎよう と たま
詮ずるところ、十二因縁を觀じて經行すと説き給えり。

じゆうにいんねん ほうかい いみよう ほけきよう いみよう ゆえ
十二因縁は法界の異名なり。また法華經の異名なり。その故

じゆもく しようけか すなわ しようじゆういめつ しそう
は、樹木は枝葉花菓あり。これ即ち生住異滅の四相なり。

だいかくせそん じゆうにいんねん くてん かん きようぎよう たま せん
大覺世尊、十二因縁の流轉を觀じ、經行し給えり。詮ず

まつぼうとうこん

いつさいしゆじよう

ほけきよう

ぼう

るてん

るところ、末法当今も、一切衆生の法華経を謗じて流転す

かん

にほんこく

にちれんきようぎよう

なんみようほうれんげきよう

べきを觀じて、日本国を日蓮経行して南無妙法蓮華経と

ぐつう

ほつけ

ぎようじや

弘通すること、またまたかくのごとくなり。法華の行者は

どうじよう

ひと

うんぬん

ことごとく道場に坐したる人なり云々。

いち

こんがきむい

いまわれ

よろこ

おそ

な

こと

一、「今我喜無畏（今我は喜んで恐れ無し）」の事

おお

い

きようもん

ごんきよう

と

お

たま

仰せに云わく、この経文は権教を説き畢わらせ給い

ほけきよう

と

たも

とき

よろこ

畏

て法華経を説かせ給う時なれば、「喜んでおそれなし」と觀

たま

ゆえ

にぜん

あいだ

いつさいしゆじよう

おそ

たま

じ給えり。その故は、爾前の間は一切衆生を恐れ給えり。

ほけきよう

と

むな

「もし法華経を説かずして、空しくやあらんずらん」と思し

おぼ

めして、おそ ふか あ もん 恐れ深く有りという文なり。さて、いま おそ 今は畏るべき

ことなく、じせつきた と おそ 時節来つて説くあいだ、「おそ 恐れなし」と喜び給え

り。いま にちれんら たぐ 今、日蓮等の類いもかくのごとし。にちれん しょうねんさんじゅうに 日蓮も生年三十二

まではおそ 恐れありき。「おそ もしや、この南無妙法蓮華経を弘めず

してあらんずらん」とおそ 恐れありき。今は即ちこのいま すなわ おそ な 恐れ無し。

既に、すで まっぼう どうじ なんみょうほうれんげきよう しちじ にほんこく ひろ 末法の当時、南無妙法蓮華経の七字を日本国に弘む

るあいだおそ 恐れなし。終には一閻浮提につい いちえんぶだい こうせんる ふ 広宣流布せんこと

一定なるべし云々。いちじよう うんぬん

一、「いち がもんぜほうおん きもうかいいじよ われ ほうおん き 我聞是法音 疑網皆已除（きもう 我はこの法音を聞いて、疑網

みな のぞ こと
は皆すでに除こりぬ」の事

おほ

い

ほうおん

なんみようほうれんげきよう

ぎもう

仰せに云わく、「法音」とは、南無妙法蓮華経なり。「疑網」

さいごほん

むみよう

い

きよう

たも

たてまつ

とは、最後の品の無明を云うなり。この経を持ち奉れば、

のぞ

と

もん

しやりほつ

さんじゆう

ことごとく除くと説かれたり。この文は、舍利弗が三重の

むみよう

いちじ

くじん

りようげ

いま

にほんこく

無明、一時に俱尽することを領解せるなり。今、日本国の

いっさいしゆじよう

ほけきよう

ほうおん

き

よ

しん

一切衆生、法華経の法音を聞くといいども、いまだ能く信

ぎもうみな

のぞ

のぞ

にゆうあびごく

ぜず。あに疑網皆すでに除かんや。除かずんば、「入阿鼻獄

あびごく

い

うたが

ぎ

じ

がんほん

(阿鼻獄に入る)は疑いなきなり。「疑」の字は、元品の

むみよう

うたが

た

しん

い

しやく

無明のことなり。この疑いを断つを、信とは云うなり。釈

に云いわく「疑うたがいなきを信しんと曰いう」と云いえり。身しん子じはこの疑うたが
いなゆえき故けに、華け光こう仏ぶつと成なれり。

今いま、日に蓮ち等らの類たぐいは、題だい目もくの法ほう音おんを信しん受じゆする故ゆえに、疑ぎ網もう

さらなに無なし。「如に我よ等が無む異い（我わがわごとく等ひとしくして異ことなるこ

となし）」とて、釈しやく尊そんと同どう等とうの仏ほとけにやしすやしすとしならんこと

疑うたがいなぎきなり。「疑ぎ網もう」といしうは、色しき心しんの二に法ほうに有ある惑わく障しよう

なり。「疑ぎ」は心しん法ほうにあり、「網もう」は色しき法ほうに有あり。この経きやうを

持たち奉たてり信しんずれば、色しき心しんの二に法ほうの煩ぼん悩のう共ともにのことごとく除のぞ

くといかうことなり。この「皆かい已い」の「已じ」の字じは、身しん子じ尊そん者じゃ、

こうかいさんけんいち

き い い

いま りようげ もんだん

広開三顯一を指して「已」とは云うなり。今は領解の文段な

しんじ みようほう じつそう り ちようもん

しんえだいかんき こころ

り。身子、妙法の実相の理を聴聞して、「心懐大歡喜（心

だいかんき いだ

せん

しやりほつそんじゃほど

に大歡喜を懐く）せしなり。詮ずるところ、舍利弗尊者程

ちしや ほけきよう きた けこうぶつ

ぎもう だんじよ

の智者、法華經へ来つて華光仏となり、疑網を断除せり。

まつぼうとうじ

ごんにん

ほうぼう

ひとびと

きよう

いかにいわんや、末法当時の権人、謗法の人々、この經に

あ じようぶつ

うんぬん

値わずんば、成仏あらんや云々。

いち いほんがんこ せつさんじようほう ほんがん

ゆえ

さんじよう

ほう

一、「以本願故、説三乘法（本願をもつての故に、三乗の法

を説く）の事

をお い きようもん

おほ

い

きようもん

しんじそんじゃ

じようどう

くに

仰せに云わく、この經文は、身子尊者は、成道の国・

りくせかい さんじよう ほう あくせ

離垢世界にて、三乗の法は悪世にはあらず、しかりといえ

しんじほんがん ゆえ と い ほんがん

ども身子本願の故に説くと云えり。その本願というは、身子、

ぼさつ ぎよう た こつげん ばらもん まなこ こ と

菩薩の行を立てしに、乞眼の婆羅門に眼を乞い取られて、

とき ぼさつ ぎよう たいてん ぼさつ ぎよう ひやつこう た

その時、菩薩の行を退転したり。この菩薩の行を百劫立

ろくじつこう いましじつこう 足

てけるに、六十劫なして今四十劫たらざりき。この時、乞眼

まなこ 抉 取 とき ぼさつ ぎよう たい

に眼をくじりとられて、その時、菩薩の行を退して、

じようぶつ ひ さんじよう ほう ひら ねが がん た

「成仏する日に、三乗の法を開かんと願う」の願を立て

じようほん じようど ぜん ひら もち さんじよう

たるなり。「上品の浄土は漸を開くを須いず」なれば、三乗

ほう と いほんがん

の法を説くことはさらにもつてあるまじけれども、「以本願

こ ゆえ さんじよう ほう と ぎよう ぜんたらぶつ

故」の故にて、三乗の法を説くなり。この行は禅多羅仏の

みもと た しんじ ろくじゆうたい

所にして立つるなり。このことは「身子が六住退」とて、

おお きた じゆうじゆう ぎせい あ こころえがた

大いなる沙汰なり。重々の義勢これ有り。たやすく心得難

きことなり あるいは 地前を怖れしめんと欲す」の意、 ほつ こころ

あるいは「権者の退」云々。詮ずるところ、「六住退」と

ごんじゃ たい うんぬん せん ろくじゆうたい

いは、六根・六境に菩薩の行を取られたりということ

ろつこん ろつきよう ぼさつ ぎよう と

なり。

なり。

おも まつほうとうこん ほけきよう しゆぎよう

これをもつてこれを思うに、末法当今、法華経を修行

かなら しんじ たいてん せん

せんには、必ず身子が退転のごとくなるべし。詮ずるところ

しんじ まなこ と

ぼさつ ちえ ぎよう と

ろ、身子が眼を取らるるは、菩薩の智慧の行を取らるる

いま にちれんら たぐ なんみようほうれんげきよう まなこ たも たてまつ

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経の眼を持ち奉

ほうぼう しょにん しょうげ まなこ 抉 と

るに、謗法の諸人に障礙せらるる、あに眼をくじり取らる

せん か こつげん ばらもん まなこ こ

るにあらずや。詮ずるところ、彼の乞眼の婆羅門、眼を乞

しんじ ぼさつ ぎよう たいてん

いしは、身子が菩薩の行を退転せしめんがために、これを

こ 踏 躪 す まった ぼさつ くよう かつ もと

乞いてふみにじりて捨てたり。全く菩薩の供養の方を本と

まなこ こ たいてん

して眼をば乞わざりしなり。ただ退転せしめんがためなり。

しんじ いちねん ぼさつ ぎよう た あ

身子は、一念に菩薩の行を立てて、かかることに値えり。

きようこう ぼさつ ぎよう た にじよう ぎよう た

「向後は菩薩の行をば立つべからず。二乗の行を立つべ

し」と云つて後悔せし、その故に、成仏の日、三乗の法を

説くなり。詮ずるところ、乞眼の婆羅門の責めを堪えざる

が故なり。法華經の行者、三類の強敵を堪忍して、妙法の

信心を捨つべからざるなり。信心をもつて眼とせり云々。

一、「有大長者（大長者有り）」の事

仰せに云わく、この長者において、天台大師、三つの

長者を釈し給えり。一には世間の長者、二には出世の

長者、三には觀心の長者これなり。この中に出世・觀心の

長者をもつて、この品の長者とせり。長者とは釈迦如来

のことなり。観心の長者の時は一切衆生なり。詮ずると

かんじん ちょうじゃ とき いっさいしゆじょう せん
ほけきょう ぎょうじゃ なんによとも ちょうじゃ もんぐ ご くわ

ころ、法華經の行者は男女共に長者なり。文句の五に委し

しやく まつぼうとうこん ちょうじゃ もう にちれんら たぐ

く釈せり。末法当今の長者と申すは、日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきょう とな たてまつ もの

南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。

みつ ちょうじゃ しやく とき もんぐ ご い

されば、三つの長者を釈する時、文句の五に云わく

に いごう ひょう みつ ちょうじゃ しやく とき もんぐ ご い

「二に位号を標するに、三つとなす。一には世間の長者、

に しゆつせ ちょうじゃ さん かんじん ちょうじゃ よ じつとく そな

二には出世の長者、三には観心の長者なり。世に十徳を備

いち しょうたつと に くらいたか さん おお と

う。一には姓貴し。二には位高し。三には大いに富む。

し いたけ ご ちふか ろく としお しち ぎょうきよ

四には威猛し。五には智深し。六には年耆ゆ。七には行淨

し。八には礼備う。九には上歎ず。十には下歸す」云々。

また云わく「出世の長者は、仏は三世の真如實際の中

より生ず。功成り、道著れて、十号極まり無し。法財・

万徳、ことごとく皆つぶさに満ぜり。十力雄猛にして、魔

を降し、外を制す。一心の三智、通達せずということなし。

早く正覚を成じて久遠なること、かくのごとし。三業は智

に随つて、運動して失無し。仏の威儀を具えて、心の大

いなること海のごとし。十方の種覚、共に称誉するところ

なり。七種の方便しかも来つて依止す。これを、出世の仏・

だいちようじゃ

な

さん

かんじん

かんじん

ち

じつそう

い

大長者と名づく。三に観心とは、観心の智は実相より出ず。

しょう

ぶつけ

しゆしょうしんしょう

さんわくお

生じて仏家にあり。種性真正なり。三惑起こらず。いま

しん おこ

によらい

ころも

き

じやくめつにん

だ真を発さずといえども、これ如来の衣を着れば寂滅忍

しょう

さんたい

いっさい

くどく

ごんぞう

しょうがん

え

あいけん

と称す。三諦に一切の功徳を含蔵す。正観の慧もて愛見を

ごうぶく

ちゆうどうなら

て

ごんじつ

あき

ひさ

降伏す。中道双べ照らして、権実ならびに明らかなり。久

ぜんこん

つ

よ

かん

しゆ

かん

しちほうべん

しく善根を積んで、能くこの観を修す。この観は、七方便の

かみ い

かん

しんしょう

かん

じようじよう

な

上に出でたり。この観は心性を観ずれば上定と名づく。

すなわ

さんごうかな

えん

へ

きよう

たい

いぎとがな

よ

則ち三業過無し。縁に歴て境に対するに威儀失無し。能く

かん

じんしんげ

そう

しよぶつ

みなかんぎ

かくのごとく観ぜば、これ深信解の相なり。諸仏は皆歡喜し

て持法の者を歎美したもう。天竜・四部は恭敬・供養す。

下の文に云わく『仏子住是地 即是仏受用 経行及坐臥

（仏子この地に住せば、即ちこれをば仏は受用したもう。

経行しおよび坐臥したまわん）。既にこの人を称して

仏となす。あに觀心の長者と名づけざらんや」。

この釈、分明に觀心の長者に十徳を具足すと釈せ

り。いわゆる引証の文に、分別功德品の「即是仏受用」の

文を引けり。経文には「仏子住此地」とあり。「此」の字を

「是」の字にうつせり。「経行若坐臥」の「若」を「及」

の字にかえたり。また法師品の文を引けり。詮ずるところ、

ぶっし

ほけきよう

ぎようじゃ

しじ

じっそう

だいち

「仏子」とは法華經の行者なり。「此地」とは実相の大地な

きようぎようにやくぎが

ほけきよう

ぎようじゃ

しいぎ

しよさ

り。「經行若坐臥」とは、法華經の行者の四威儀の所作

ふま

ほとけ

ふま

われ しゆじよう

ふ

の振る舞い、ことごとく仏の振る舞いなり。我ら衆生の振

ま とうたい

ほとけ

振 舞

とうたい

る舞いの当体、仏のふるまいなり。この当体のふるまいこ

ちようじゃ

かんじん

ちようじゃ

われ

ほんぷ

そ長者なれ。よつて、觀心の長者は我ら凡夫なり。しか

まつぼうとうこん

ほけきよう

ぎようじゃ

ほか

かんじん

ちようじゃな

るに、末法当今の法華經の行者より外に觀心の長者無き

いま

にちれんら

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者、

むじようほうじゆ

ふ

ぐじとく

むじよう

ほうじゆ

もと

おの

「無上宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ずか

え

ちようじや

きしようしにんいぶつ

すで

ら得たり)」の長者にあらずや。「既称此人為仏(既にこの

ひと しょう

ほとけ

ろくじ

こころ

とど

あん

人を称して仏となす)」の六字に心を留めて案ずべきな

うんぬん

り云々。

いち たうでんたく

おお でんたくあ

こと

一、「多有田宅(多く田宅有り)」の事

おお い

でんたく

ちようじや

ざいほう

せん

仰せに云わく、「田宅」とは、長者の財宝なり。詮ず

でん

いのち

たく

み

もんぐ

るところ、「田」というは命なり、「宅」とは身なり。文句の

ご でんたく

しんみよう しゃく

でん

こめ

こめ いのち

五に、「田宅」をば身命と釈せり。「田」は米なり。米は命

継

たく

み

宿

いえ

しんみよう

ふた

をつぐ。「宅」は身をやどす。これは家なり。身命の二つ

あんのん

ほか

ざいほう

な

ほうもん

やく

を安穩にするより外に財宝は無きなり。法門に約すれば、

「田」は定、「宅」は慧なり。よつて、定は田地のごとし。

慧は万法のごとし。我らが一心の田地より諸法の万法は起

これり。「法華一部、方寸もて知るべし」と釈して、八年の

法華経も一心が三千と開きたるなり。詮ずるところ、「田」

は定なれば妙の徳、「宅」は慧の徳なれば法の徳。また

本迹両門なり、止観の二法なり。教主釈尊、本迹両門

の「田宅」をもつて一切衆生を助け給えり。

「田宅」は我ら衆生の色心の二法なり。法華経に値い

奉つて南無妙法蓮華経と唱え奉る時、煩惱即菩提・生死

そくねはん たいだつ

たうでんたく

ちようじや

即涅槃と体達するなり。あに「多有田宅」の長者にあらず

たう

こころ

しんぼう

ぐそく

しんじゆ

しきほう

や。「多有」という心は、心法に具足する心数なり。色法に

ぐそく

しよさ

たうでんたく

もん

いちねんさんぜん

具足する所作なり。しかれば、「多有田宅」の文は、一念三千

ほうもん

ゆえ

いちねん

じよう

さんぜん

え

すで

の法門なり。その故は、一念は定なり、三千は慧なり。既

しやく

い

でんたく

べつぴ

でん

よ

いのち

やしな

に釈に云わく『田宅』は別譬なり。『田』は能く命を養

ぜんじよう

はんにや

たす

たと

たく

み

す

う。禅定の般若を資くるに譬う。『宅』は身を栖ますべし。

じつきよう

ち

しよたく

たと

うんぬん

しやく

ふんみよう

実境の智の所託となるに譬う」云々。この釈、分明なり。

でんたく

しんみよう

しんみよう

すなわ

なんみようほうれんげきよう

「田宅」は身命なり。身命は即ち南無妙法蓮華経なり。

だいまく

たも

たてまつ

もの

たうでんたく

ちようじや

この題目を持ち奉る者は、あに「多有田宅」の長者にあ

らずや。今、末法に入つて、日蓮等の類い、「多有田宅」の

ほんしゆ

よせつしゆぎよう

せつ

しゆぎよう

ぎようじや

本主として「如説修行（説のごとく修行す）」の行者な

うんぬん

り云々。

いち

とういちだいしや

とういち

だいしや

こと

一、「等一大車（等一の大車）」の事

おお

い

だいしや

じきしどうじよう

ただ

仰せに云わく、この「大車」とは、「直至道場（直ち

どうじよう

いた

だいびやくごしや

ごしつによふう

はや

に道場に至る）」の大白牛車にして、「其疾如風（その疾き

かぜ

せん

なんみようほうれんげきよう

こと風のごとし）」なり。詮ずるところ、南無妙法蓮華経を、

とういちだいしや

い

とう

しよほうじつそよう

「等一大車」と云うなり。「等」というは、「諸法実相」な

いち

ゆいとういちじようほう

いちじよう

ほう

あ

り。「一」とは、「唯一乘法（ただ一乗の法のみ有り）」

だい

だいじょう

しゃ

いちねんさんぜん

なり。「大」とは、大乘なり。「車」とは、一念三千なり。

しゃく

とう

じ

こひと

しゃひと

しゃく

よつて、釈には「等」の字を「子等し」「車等し」と釈せ

こひと

とう

によがとうむい

わ

ひと

り。「子等し」の「等」と「如我等無異（我がごとく等しく

こひと

とう

おな

しゃひと

して異なることなし）」の「等」とは同じなり。「車等し」

とう

びようどうだいえ

とう

いま

にちれんら

たぐ

の「等」は、「平等大慧」の「等」なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

なんによ

きせんとも

むじよう

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、男女・貴賤共に「無上

ほうじゆ

ふぐじとく

むじよう

ほうじゆ

もと

おの

え

宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ずから得た

きんげん

たも

もの

ちしや

ぐしや

り）の金言を持つ者なり。智者・愚者をきらわず、ともに

そくしんじようぶつ

うんぬん

即身成仏なり云々。

疏の五に云わく「二には等しき子、二には等しき車な

こひと

ゆえ

すなわ

こころひと

いつさいしゆじようひと

り。子等しきをもつての故に、則ち心等し。一切衆生等

ぶつしようあ

たと

ぶつしようおな

ゆえ

ひと

こ

しく仏性有るに譬う。仏性同じきが故に等しくこれ子な

だいに

しゃひと

ほうひと

ゆえ

ぶつぼう

り。第二に『車等し』とは、法等しきをもつての故に、仏法

いつさいほう みなまかえん

たと

まかえん

にあらざることなし。一切法は皆摩訶衍なるに譬う。摩訶衍

おな

ゆえ

ひと

だいしゃ

かくし

おのおの

同じきが故に、等しくこれ大車なり。しかして『各賜（各

たま

い

おのおの

ほんじゆう

したい

ろくど

むりよう

しよほう

賜う）』と言うは、各、本習の四諦・六度・無量の諸法に

したが

おのおのくじゆう

しんじつ

かいじ

くじゆうおな

随う。各旧習において真実を開示す。旧習同じからず。

ゆえ

おのおの

い

みな

まかえん

ゆえ

だいしゃ

い

故に『各』と言う。皆、摩訶衍なり。故に『大車』と言う」

うんぬん

云々。

いち ごしやこうこう

くるま こうこう

こと

一、「其車高広（その車は高広なり）」の事

おお い

しや

なんみようほうれんげきよう

すなわ

仰せに云わく、この「車」は、南無妙法蓮華経なり。即

われ しゆじよう

ほつけいちぶ

そうたい

こうこう

ち我ら衆生の体なり。法華一部の総体なり。「高広」とは

ぶつちけん

しや

ほうべんぼん

とき

しよぶつちえ

仏知見なり。されば、この車を方便品の時は「諸仏智慧」

と

ちえ

じんじんむりよう

しようたん

たん

ことば

と説けり。その智慧を「甚深無量」と称歎せり。歎の言に

じんじんむりよう

ごしや

と

こうこう

は「甚深無量」とほめたり。ここには「其車」と説いて「高広」

もんぐ

ご

ごしや(こうこう)

とほめたり。されば、文句の五に云わく『其車高広』より

しも

によらい

ちけん

じんのん

たと

よこ

ほうかい

へんさい

下は、如来の知見の深遠なることに譬う。横に法界の辺際に

あまね たて さんたい げんてい てつ ゆえ こうこう い
周く、豎に三諦の源底に徹す。故に『高広』と言うなり。

せん
詮ずるところ、この「如来」とは一切衆生のことなり。
いっさいしゆじょう

すで しょほうじつそう ほとけ ゆえ ちけん しきしん にほう
既に諸法実相の仏なるが故なり。「知見」とは、色心の二法

なり。「知」は心法、「見」は色法なり。色心二法を「高広」
ち しんぼう けん しきほう しきしんにほう こうこう
なり。「知」は心法、「見」は色法なり。色心二法を「高広」

と云えり。「高広」即ち本迹二門なり。これ即ち
い こうこう すなわ ほんじやくにもん すなわ
と云えり。「高広」即ち本迹二門なり。これ即ち

南無妙法蓮華経なり云々。
なんみょうほうれんげきよう うんぬん

一、「是朽故宅 属于一人（この朽ち故りたる宅は、一人に属
いち ぜく こたく ぞくういちにん く ふ いえ いちにん ぞく
一、「是朽故宅 属于一人（この朽ち故りたる宅は、一人に属

す」の事

仰せに云わく、この文をば、文句の五に云わく「失火の
おほ い もん もんぐ ご い しっか
仰せに云わく、この文をば、文句の五に云わく「失火の

よし あ 由を明かす。この「宅」とは、三界の火宅なり。「火」と云

うは、煩惱の火なり。この「火」と「宅」とをば「属于一人」

とて、釈迦一仏の御利益なり。弥陀・薬師・大日等の諸仏の

救護にあらず、教主釈尊一仏の御化導なり。「唯我一人

能為救護（ただ我一人のみ、能く救護をなす）」とは、これ

なり。この「属于一人」の文を、重ねて五の卷の提婆品に説

いて云わく「観三千大千世界、乃至無有如芥子許、非是菩薩

捨身命処。為衆生故（三千大千世界を觀るに、乃至芥子の

ごときばかりも、これ菩薩の身命を捨てたもうところにあ

しゆじよう

ゆえ

らざるることあることなし。衆生のための故なり」。

みようらくだいし

ぞくういちにん

きようもん

しやく

とき き

妙楽大師、この「属于一人」の経文を釈する時、記

ごい

ちようじゃ

き

いつしきいつこう

いつしきみな

の五に云わく「ことごとく長者に帰す。一色一香、一切皆

はん

すで

ちようじゃ

き

しやく

しかなり」と判ぜり。既に「ことごとく長者に帰す」と釈

ほうかい

あ

いつさいしゆじよう

う

くのう

しやくそん

して、法界に有りとある一切衆生の受くる苦惱をば、釈尊

いちにん

ちようじゃ

き

しやく

いつしきいつこう

いつさいみな

一人の長者に帰すと釈せり。「一色一香、一切皆しかなり」

ほうかい

せんそうばんぼく

ひ けらくよう

てい

みなむじよう

とは、法界の千草万木・飛花落葉の体たらく、これ皆無常

せんめつ

かたち

み

ぶつどう

き

ぞくういちにん

りやく

遷滅の質と見て仏道に帰するも、「属于一人」の利益なり。

りやく

ほんげん

なんみようほうれんげきよう

ないしよう

ひ

い

この利益の本源は南無妙法蓮華経の内証に引き入れしめ

んがためなり。

詮せんずるところ、末法まつぼうに入いつて「属ぞく于一う人いちにん」の利益りやくは、日蓮にちれん

が身みに当あたりたり。日本国にほんこくの一切衆生いつさいしゆじようの受うくる苦惱くのうは、こ

とごとく日蓮一人にちれんいちにんが「属ぞく于一う人いちにん」なり。教主きようしゆしやくそん釈尊しやくそんは「唯我ゆいが

一人いちにん能のう為いく救護くご」、日蓮一人にちれんいちにん、能のう為いく救護くごなり云々。うんぬん

文句もんぐの五ごに云いわく『是朽故宅ぜくこたく 属ぞく于一う人いちにん』より下しも、第二だいに

に一偈有いちげあつて、失火しつかの由よしを明あかす。三界さんがいはこれ仏ほとけの化け応おうの

処ところなり。発心ほっしんしてより已来このかた、度脱どだつせんと誓願せいがんす。故ゆえに『属ぞく于

一人いちにん』と云いう。この釈しゃくに「発心ほっしんしてより已来このかた、度脱どだつせん

と誓願すせいがん もんの文もん、あに日蓮が身にちれん みにあらずや云々うんぬん。

一、「諸鬼神等しよきじんとう 揚声大叫ようしようだいきよう（諸もろもろの鬼神等きじんとうは、声こえを揚げて大おお

いに叫ぶさけ）」の事こと

仰せおおに云いわく、「諸鬼神等しよきじんとう」というは、親類しんるい・部類等ぶるいとうを、

「鬼神きじん」と云いうなり。我ら衆生われ しゆじよう、死ししたる時とき、妻子眷属さいしけんぞくあ

つまりて悲歎ひたんするを「揚声大叫ようしようだいきよう」とは云いうなり。文句もんぐの五ご

に云いわく「『諸鬼神等しよきじんとう』より下しも、第四だいしに一行半いちぎようはんは、焼やかる

る相そうを明あかす。あるいは云いわく、親属しんぞくを『鬼神きじん』となし、哭泣こつきゆう

を『揚声ようしよう』となす」。

いち じようしほうじよう じきしどうじよう ほうじよう じよう ただ

一、「乗此宝乘 直至道場（この宝乘に乗じて、直ちに

どうじよう いた こと

道場に至る）」の事

おお い きようもん われ しゅじよう ぼんのうそくぼだい

仰せに云わく、この経文は我ら衆生の煩惱即菩提・

しょうじそくねはん あ ゆえ もんぐ ごと い

生死即涅槃を明かせり。その故は、文句の五に云わく「こ

いんか ゆえ じきし い しゃく ところ

の因易わることなきが故に、『直至』と云う」。この釈の心

にぜん こころ ぼんのう す しょうじ いと べつ ぼだい ねはん

は、爾前の心は煩惱を捨てて生死を厭いて別に菩提・涅槃

もと ほけきよう こころ ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん い

を求めたり、法華経の意は煩惱即菩提・生死即涅槃と云え

じき そく おな せん にちれんら

り。「直」と「即」とは同じことなり。詮ずるところ、日蓮等

たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの じゅうしよ すなわ

の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者の住処は即ち

じやつ(じやつ)

こころ

ほうじよう

じよう

寂光土なりと心得べきなり。しかれば、この宝乗に乗じ

みようかくごつか

くらい いた

じきしどうじよう

い

てたちまちに妙覚極果の位に至るを、「直至道場」とは云

じきし

もん

こころ

しじゆうにい

きわ

うなり。「直至」という文の意は、四十二位をここにて極め

じき

いちじ

じごくそくじやつこう

がきそくじやつこうど

たり。この「直」の一字は、地獄即寂光・餓鬼即寂光土な

ほけきよう

ぎようじや

じゆうしよ

さんごくこうや

じきし

り。法華經の行者の住処は、山谷曠野なりとも、「直至

どうじよう

どうじよう

くきよう

じやつこう

道場」なり。「道場」とは、究竟の寂光なり。

じようしほうじよう

かみ

じよう

ほつけ

ぎようじや

よつて、「乗此宝乗」の上の「乗」は法華の行者、

ほん

こころ

ちゆうこん

しだいししようもん

そう

いっさい

この品の意にては中根の四大声聞なり。総じては一切

しゆじよう

いま

まつぼう

い

にちれんら

たぐ

衆生のことなり。今、末法に入つては、日蓮等の類いなり。

ほうじよう

じよう

じ

だいびやくごしや

みようほうれんげきよう

「宝乗」の「乗」の字は、大白牛車の妙法蓮華経なり。

かみ

じよう

のうじよう

しも

じよう

しよじよう

しかれば、上の「乗」は能乗、下の「乗」は所乗なり。

ほうじよう

れんげ

しやか

たほうとう

しよぶつ

ほうじよう

「宝乗」は蓮華なり。釈迦・多宝等の諸仏も、この「宝乗」

じよう

たま

だいばほん

かさ

と

とき

にやくさいぶつぜん

に乗じ給えり。これを提婆品に重ねて説く時、「若在仏前、

れんげけししよう

ぶつぜん

あ

れんげ

けししよう

い

蓮華化生（もし仏前に在らば、蓮華に化生せん）」と云えり。

しやか

たほう

にぶつ

われ

こしん

こしん

ほけきよう

釈迦・多宝の二仏は、我らが己心なり。この己心の法華経に

あ

たてまつ

じようぶつ

あらわ

しやか

たほう

にぶつ

値い奉って成仏するを顕さんとして、釈迦・多宝の二仏

びようぎ

じようしほうじよう

じきしどうじよう

あらわ

たま

並座して、「乗此宝乗 直至道場」を顕し給えり。

じよう

くるま

くるま

れんげ

れんげ

この「乗」とは車なり。車は蓮華なり。この蓮華の

うえ みようほう われ しょうじ にほう にぶつ じきし し
上の妙法は、我らが生死の二法、二仏なり。「直至」の「至」

は、ここよりかしこへいたるの「至」にはあらず。住処即
じゅうしょそく

寂光というを、「至」とは云うなり。この「宝乗」の「宝」
じやくこう

は、七宝の大車なり。七宝即ち頭上の七穴、七穴即ち末法
しつぽう だいしや しつぽうすなわ ずじよう しちけつ しちけつすなわ まつぽう

の要法・南無妙法蓮華經これなり。この題目の五字、我ら
ようほう なんみようほうれんげきよう だいもく ごじ われ

衆生のためには、三途の河にては船となり、紅蓮地獄にて
しゆじよう さんず かわ ふね ぐれんじごく

は寒さをのぞき、焦熱地獄にては涼風となり、死出の山に
さむ 除 しょうねつじごく りようふう しで やま

ては蓮華となり、渴せる時は水となり、飢えたる時は食と
れんげ かつ とき みず う とき じき

なり、裸なる時は衣となり、妻となり、子となり、眷属と
はだか とき ころも め こ けんぞく

なり、家となり、無窮の応用を施して一切衆生を利益し給
なり、家となり、無窮の応用を施して一切衆生を利益し給

う。「直至道場」とは、これなり。よつて、この身取りも直
う。「直至道場」とは、これなり。よつて、この身取りも直

さず寂光土に居するを、「直至道場」とは云うなり。「直」
さず寂光土に居するを、「直至道場」とは云うなり。「直」

の字、心を留めてこれを案ずべし云々。
の字、心を留めてこれを案ずべし云々。

一、「若人不信 毀謗此經 則断一切 世間仏種（もし人信
一、「若人不信 毀謗此經 則断一切 世間仏種（もし人信

ぜずして、この經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜ
ぜずして、この經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜ

ん」の事
ん」の事

仰せに云わく、この經文の意は、小善の成仏を信ぜ
仰せに云わく、この經文の意は、小善の成仏を信ぜ

ずんば、一切世間の仏種を断ずということなり。文句の五に
ずんば、一切世間の仏種を断ずということなり。文句の五に

い こんきよう しようぜん じようぶつ あ えんいん と
云わく「今経は小善の成仏を明かす。これは縁因を取つ

ぶつしゆ しようぜん じようぶつ しん すなわ いっさい
て仏種となす。もし小善の成仏を信ぜずんば、即ち一切

せけん ぶつしゆ だん もん にぜんきよう こころ しようぜん じようぶつ
世間の仏種を断ずるなり」文。爾前経の心は、小善の成仏

あ ほけきよう こころ いちげ いっこう しようぜん
を明かさざるなり。法華経の意は、一華・一香の小善も

ほけきよう き だいぜん ほうかい じゆうまん だいぜん
法華経に帰すれば大善となる。たとい法界に充滿せる大善

きよう あ ぜんこん たと
なりとも、この経に値わずんば善根とはならず。譬えば、

しよが みず たいかい い しお あじ い もと
諸河の水、大海に入りぬれば鹹の味となる。入らざれば本の

みず ほうかい ぜんこん ほけきよう きにゆう ぜんこん
水なり。法界の善根も、法華経へ帰入せざれば善根とはな

らざるなり。

されば、釈しやくに云いわく『断だん一切いつさい仏種ぶつしゆ（一切だんの仏種ぶつしゆを断だんず）』

とは、浄名じようみやうには煩惱ぼんのうをもつて如来にょらいの種たねとなす。これは

境界性きようかいしやうを取とるなり。この釈しやくの意ごころは、浄名經じようみやうきやうの意ごころな

らば、我われら衆生しゆじやうの一日いちにち一夜いちやに作なすところの罪業ざいごう、八億四千はちおくしせん

の念慮ねんりよを起おこす。余經よきやうの意ごころは、皆みな三途さんずの業因ごういんと説とくなり。

法華經ほけきやうの意ごころは、この業因ごういん即すなわち仏ほとけぞと明あかせり。されば、

「煩惱ぼんのうをもつて如来にょらいの種子しゆじとす」と云いうは、この義ぎなり。

この浄名經じようみやうきやうの文もんは、正まさしく「文もんは爾前にぜんに在あるも、義ぎは法華ほつげ

に在あり」の意ごころなり。この「境界性きようかいしやう」というは、末師まつし釈しやくす

とき よ ぼんのう しょう きょうかいしょう な ほん

る時、「能く煩惱を生ずるを、『境界性』と名づく」と判

われ しゆじょう げんにとう ろっこん もうしゅう お

ぜり。我ら衆生の眼耳等の六根に妄執を起こすなり。こ

きょうかいしょう い ごんきょう こころ ねんりよ す

れを「境界性」と云うなり。権教の意は、この念慮を捨

と ほけきょう こころ きょうかいしょう ほか さんいん

てよと説けり。法華經の心は、この「境界性」の外に三因

ぶつしょう しゆし すなわ さんじんえんまん ぶつか じょう

仏性の種子なし、これ則ち三身円満の仏果を成すべき

しゆしょう と しゆしょう ごんきょう しん ひと

種性なりと説けり。この種性を、権教を信ずる人はこれ

し きょう ぼう ゆえ ほんぶそくごく ぎ し

を知らず、この経を謗するが故に、凡夫即極の義をも知ら

ゆえ いったいせけん ぶつしゆ だん ろくどう しゆじょう

ず。故に一切世間の仏種を断ずるなり。されば、六道の衆生

さんいんぶつしょう ぐそく つい さんじんえんまん そんよう あらわ

も三因仏性を具足して終に三身円満の尊容を顕すべきと

ころに、この経を謗するが故に、六道の仏種をも断ずるな
ころに、この経を謗するが故に、六道の仏種をも断ずるな
ころに、この経を謗するが故に、六道の仏種をも断ずるな

り。されば、妙楽大師云わく「この経はあまねく六道の仏
り。されば、妙楽大師云わく「この経はあまねく六道の仏
り。されば、妙楽大師云わく「この経はあまねく六道の仏

種を開く。もしこの経を謗せば、義、断に当たるなり」。
種を開く。もしこの経を謗せば、義、断に当たるなり」。
種を開く。もしこの経を謗せば、義、断に当たるなり」。

詮ずるところ、日蓮が意は、「一切」の言は十界をさ
詮ずるところ、日蓮が意は、「一切」の言は十界をさ
詮ずるところ、日蓮が意は、「一切」の言は十界をさ

す。この経を謗するは、十界の仏種を断ずるなり。されば、
す。この経を謗するは、十界の仏種を断ずるなり。されば、
す。この経を謗するは、十界の仏種を断ずるなり。されば、

「誹謗」の二字を大論に云わく「口に謗るを『誹』と言ひ、
「誹謗」の二字を大論に云わく「口に謗るを『誹』と言ひ、
「誹謗」の二字を大論に云わく「口に謗るを『誹』と言ひ、

心に背くを『謗』と云う」。よつて、色心三業に経て法華経
心に背くを『謗』と云う」。よつて、色心三業に経て法華経
心に背くを『謗』と云う」。よつて、色心三業に経て法華経

を謗じ奉る人は「入阿鼻獄（阿鼻獄に入る）」、疑いな
を謗じ奉る人は「入阿鼻獄（阿鼻獄に入る）」、疑いな
を謗じ奉る人は「入阿鼻獄（阿鼻獄に入る）」、疑いな

きなり。いわゆる弘法・慈覚・智証・善導・法然・達磨等の
きなり。いわゆる弘法・慈覚・智証・善導・法然・達磨等の
きなり。いわゆる弘法・慈覚・智証・善導・法然・達磨等の

だいほうぼう もの
大謗法の者なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え
たてまつ
さんぜ しょうぶつ ぶつしゆ つ もの
うんぬん

奉るは、あに三世の諸仏の仏種を継ぐ者にあらずや云々。

いち しゃあくちしき しんごんぜんう あくちしき す ぜんう しんごん

一、「捨悪知識 親近善友(悪知識を捨てて、善友に親近す)」

の事

おお い あくちしき ざいせ ぜんしよう

仰せに云わく、「悪知識」とは、在世にては善星・

くぎやり だいばとう ぜんう かしよう しゃりほつ あなん

瞿伽利・提婆等これなり。「善友」とは、迦葉・舍利弗・阿難・

もくれんとう まつぼうとうこん あくちしき

目連等これなり。末法当今において、「悪知識」というは、

ほうねん こうぼう じかく ちしようとう ごんにん ほうぼう ひとびと ぜんちしき

法然・弘法・慈覚・智証等の権人・謗法の人々なり。「善知識」

もう にちれんら たぐ

と申すは、日蓮等の類いのことなり。

そ^う ち^しき

じ^ゆうじ^ゆう

あ

げ^ご

ち^しき

総じて、「知識」において重々これ有り。外護の知識、

ど^うぎ^よう ち^しき じ^つそ^う ち^しき

せ^ん

じ^つそ^う

同行の知識、実相の知識これなり。詮ずるところ、実相の

ち^しき

なんみ^ようほうれんげ^きよ^う

ち^しき

知識とは、いわゆる南無妙法蓮華經これなり。「知識」とは、

か^たち

こ^ころ

い

す^なわ

し^きし^ん

に^ほう

形をしり、心をしるを云うなり。これ即ち色心の二法な

ほう^ぼう

し^きし^ん

す

ほ^けき^よう

み^よう^きよ^う

み^よう^ち

し^きし^ん

あ^らわ

り。謗法の色心を捨てて、法華經の妙境・妙智の色心を顕

あく^う

ほう^ぼう

ひと^びと

ぜん^う

に^ちれ^んら

すべきなり。「悪友」は謗法の人々なり。「善友」は日蓮等の

た^く

類いなり。

い^ち

む^じよ^うほうじ^ゆ

ふ^ぐじ^とく

む^じよ^う

ほう^じゆ

も^と

お^の

一、「無上宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ず

え

こ^と

から得たり）」の事

おほ

い

むじようほうじゆ

いち

しやくそん

仰せに云わく、この「無上宝聚」において、一には、釈尊

いんぎようかとか

まんぎようまんぜん

こつずい

ほうじゆ

い

に

の因行果徳の万行万善の骨髓を宝聚と云うなり。二には、

みようほうれんげきよう

ふぐ

ちゆうこん

しだいしようもん

妙法蓮華経の事なり。「不求」とは、中根の四大声聞は

ほうじゆ

にんうんじぎい

え

しじつがし

がじつご

かくのごとき宝聚を任運自在に得たり。「此実我子、我実其

ぶ

じつ

わ

こ

われ

じつ

ちち

ゆえ

父（これは実に我が子、我は実にその父なり）」の故なり。

そう

いっさいしゆじよう

じとく

じ

総じては一切衆生の事なり。「自得」というは、「自」は

じっかい

じがとくぶつらい

われ

ほとけ

え

十界の事なり。これは「自我得仏来（我は仏を得てより

このかた

じ

おな

とく

おな

来）」の「自」と同じことなり。「得」もまた同じことな

まつぼう

い

じとく

にちれんら

たぐ

じ

り。末法に入つては、「自得」とは日蓮等の類いなり。「自」

ほけきょう ぎょうじや

とく

だいもく

とく

いちじ

とは法華經の行者、「得」とは題目なり。「得」の一字には

してい

ふく

よ

とく

ぎ

ふく

ふく

師弟を含みたり。「与」と「得」との義を含めり。「不求」

ぶつぼう

い

しゆぎよう

かくどう

しんろう

しやかによらい

とは、仏法に入るには修行・覚道の辛勞あり。釈迦如来は

しやば

おうらい

はっせんべん

ごしんろう

もと

たも

「娑婆に往来すること八千反」の御辛勞にして求め給う

くどく

いま

しやかむにぶつ

な

たま

ほけきよう

功德なり。さて、今の釈迦牟尼仏と成り給えり。法華經の

ぎょうじや

もと

くどく

じゆとく

じとく

行者は求めずしてこの功德を受得せり。よつて、「自得」

と

じ

じ

いちねん

とく

さんぜん

とは説かれたり。この「自」の字は一念なり、「得」は三千な

じ

さんぜん

とく

いちねん

じ

じ

り。また「自」は三千、「得」は一念なり。また「自」は自な

とく

た

そう

じとく

にじ

ほうかい

つ

り、「得」は他なり。総じて「自得」の二字に法界を尽くせ

り。詮せんずるところ、この妙法蓮華經を「自じ」より得えたり。

「自じ」とは、釈尊しやくそんなり。釈尊しやくそんは、即ち我が一心いっしんなり。一心いっしん

の釈迦しやくかより受得じゆとくし奉たてまつる南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきようなり。日蓮にちれんも生年しやうねん

三十二さんじゆうににして自得じとくし奉たてまつる題目だいもくなり云々うんぬん。

一、「藥草喻品」の事こと

仰おほせに云いわく、「藥やく」とは「是好良藥ぜこうろうやく（この好き良藥よ）」

の南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきようなり。妙法みょうほうを頂上ちやうじやうにいたただきたる草くさな

れば、藥くすりにあらざといふことなし。「草そう」は中根ちゆうこんの声聞しやうもんな

れども、総そうじては一切衆生いっさいしゆじやうなり。譬たとえば、土器かわらけに藥くすりをか

けたるがごとし。我ら衆生、父母果縛の肉身に

なんみょうほうれんげきょう くれすり ぼんのうそくぼだい しやうじそくねはん

南無妙法蓮華經の薬をかけたなり。煩惱即菩提・生死即涅槃

うんぬん ぶん おし ゆ もう しやく

はこれなり云々。この分を教うるを「諭」とは申すなり。釈

い ゆ ぎやうくん だいば りゆうによ ちくしやう

に云わく「『諭』とは、曉訓なり」。提婆、竜女の畜生、

にんげん てんたい らかん ぼさつとう やくそや ほとけ

人間も、天帝、羅漢、菩薩等も、ことごとく「薬草」の仏に

まつぼうとうこん ほつけ ぎやうじや にちれんら

あらずといふことなし。末法当今の法華の行者の日蓮等の

たぐ やくそや にほんこく いっさいしゆじや やくおや

類いは、「薬草」にして、日本国の一切衆生の「薬王」な

うんぬん

り云々。

いち げんぜあんのん ごしやうぜんしよ げんぜあんのん のち ぜんしよ しやう

一、「現世安穩、後生善処（現世安穩にして、後に善処に生

ず)の事 こと

仰せに云わく、詮ずるところ、この妙法蓮華経を聴聞

みようほうれんげきよう ちようもん

し奉るを、「現世安穩」とも、「後生善処」とも云えり。既

たてまつ

げんぜあんのん

ごしようぜんしよ

い

すで

に上に「聞是法已(この法を聞き已わる)」と説けり。「聞

かみ

もんぜほうい

ほう き お

と

もん

は名字即の凡夫なり。妙法を聞き奉るところにて

みようじそく

ぼんぷ

みようほう

き

たてまつ

即身成仏と聞くなり。「もし能く持つことあらば、即ち仏

そくしんじようぶつ

き

よ

たも

すなわ

ぶつ

身を持つ」とは、これなり。聞く故に持ち奉る、持ち奉

しん たも

き

ゆえ

たも

たてまつ

たも

たてまつ

るが故に三類の強敵来る。来るをもつて「現世安穩」の記文

ゆえ

さんるい

ごうてききた

きた

げんぜあんのん

きもん

顕れたり。法華の行者なること疑いなきなり。法華の

あらわ

ほっけ

ぎようじや

うたが

ほっけ

法華の行者なること疑いなきなり。法華の

ぎようじや

だいなん

あ

み

だいなん

あ

行者はかかる大難に値うべしと見えたり。大難に値うをも

ごしようぜんしよ

じようぶつ

けつじよう

げんぜ

って、「後生善処」の成仏は決定せり。これあに現世にし

あんのん

て安穩なるにあらずや。

ごしようぜんしよ

だいはほん

ふんみよう

と

せん

「後生善処」は、提婆品に分明に説けり。詮ずるところ

げんぜあんのん

ほけきよう

しん

たてまつ

さんず

はちなん

ろ、「現世安穩」とは、法華経を信じ奉れば三途・八難の

く

ぜんあく

じようげ

ひと

みな

きようしゆしやくそん

どうとう

苦をはなれ、善悪・上下の人までも、皆、教主釈尊と同等

ぶっか え

じしんほんかく

によらい

あらわ

じしん

とうたい

の仏果を得て、自身本覚の如来なりと顕す。自身の当体、

みようほうれんげきよう

やくそう

げんぜあんのん

ひら

妙法蓮華経の薬草なれば、「現世安穩」なり。ここを開く

ごしようぜんしよ

い

みようほうれんげきよう

みようほう

を「後生善処」と云うなり。妙法蓮華経というは妙法の

やくそう

せん

げんぜあんのん

しきほう

ごしやうぜんしよ

薬草なり。詮ずるところ、「現世安穩」は色法、「後生善処」

しんぼう

じっかい

しきしん

みやうほう

かいかく

げんぜあんのん

は心法なり。十界の色心、妙法と開覚するを「現世安穩、

ごしやうぜんしよ

い

せん

ほけきやう

ひろ

後生善処」とは云うなり。詮ずるところ、法華経を弘むる

げんぜあんのん

ごしやうぜんしよ

もう

うんぬん

をもつて「現世安穩、後生善処」と申すなり云々。

いち

かいしつとうおいつさいち

いっさいち

いた

こと

一、「皆悉到於一切智地（みな一切智地に到らしむ）」の事

おほ

い

いっさいち

ほけきやう

たと

仰せに云わく、「一切智地」というは法華経なり。譬え

さんぜんだいでんせかい

とち

そうもく

にんちくとう

みなだいち

そな

ば、三千大千世界の土地・草木・人畜等、皆大地に備りた

はちまんほうぞう

じゆうにぶきやう

ほつけ

きにゆう

るがごとく、八万法蔵・十二部経ことごとく法華に帰入せ

かいしつ

に

ぜんにん

あくにん

まよ

さと

しむるなり。「皆悉」の二字をば、善人も悪人も、迷いも悟

いっさいしめじよう あくごう ぜんごう ほか やくし だいにち みだ
りも、一切衆生の悪業も善業も、その外、薬師・大日・弥陀
じぞう かん のん よこ じつぼう たて さんぜ あ
ならびに地藏・観音、横に十方、豎に三世、有りとする諸仏
ぐとく もろもろ ぼさつ ぎやうとく そう じつかい しゆじよう ぜんあく
の具徳、諸の菩薩の行徳、総じて十界の衆生の善悪の
ごうさとう かいしつ と ほけきやう きにゆう
業作等を「皆悉」と説けり。これを法華經に帰入せしむる
いっさいち じ ほけきやう
を、「一切智地」の法華經と申すなり。

もんぐ しち い かいしつとう おいっさいち じ
されば、文句の七に云わく「皆悉到於一切智地」とは、
じ じつそう くきやう に ゆえ いち な
『地』とは実相なり、究竟して二にあらず、故に『一』と名
じやく つけん しょう ゆえ な ち
づくるなり。その性広博なり。故に名づけて『切』となす。
寂にして常に照なり。故に名づけて『智』となす。無住の
むじゆう

本ほんより一切いっさいの法ほうを立たつ。故ゆえに名なづけて『地じ』となす。これ

えんぎよう じつせつ

円教えんぎようの実説じつせつなり。およそ説とくところ有あれば、皆衆生みなしゆじようをし

てこの『智地ちじ』に到いたらしむ」云々うんぬん。

この釈しゃくは「一切智地いっさいちじ」の四字しじを委くわしく判はんぜり。「一いち」

をば究竟くきようと云い、「切さい」をば広博こうはくと釈しゃくし、「智ち」をば「寂じやくに

して常つねに照しょうなり」と云い、「地じ」をば「無住むじゆうの本ほん」と判はんぜ

り。しかるに、「およそ説とくところ有あれば」は約教やくきようを指さし、

「皆衆生みなしゆじようをして」は機縁きえんを納おさむるなり。十界じつかいの衆生しゆじようを指さし

て「切さい」と云い、「およそ説とくところ有あれば」を指さして「究竟くきよう

して二ににあらず、故ゆえに『一』と名なづくるなり」と云いえり。「一」
さんぜんだいせんせかい じつぼうほうかい い
とは、三千大千世界・十方かみ法界を云いうなり。その上にんちくとうに人畜等
あるは、「地」じなり。

記きの七しちに云いわく『切』を衆しゆと訓くんず」文もん。よつて、「一切」
いっさい

の二字にじに法界ほうかいを尽つくせり。諸法しよほうは「切」さいなり。実相じつそうは「一」
いち

なり。詮せんずるところ、法界実相ほうかいじつそうの妙体みようたい、照而常寂しようにじようじやくの一理いちり

にして、十界三千じっかいさんぜん、一法性いちほつしようにあらずといふことなし。これ

を「一」いちと説とくなり。さて、三千さんぜんの諸法しよほうの己々こごに本分ほんぶんなれ

ば、「切」さいの義ぎなり。しからば、「一」いちは妙みよう、「切」さいは法ほうな

り。妙法の二字、「一切」の二字なり。「無住の本」は妙の徳、「一切の法を立つ」は法の徳なり。

「一切智地」とは南無妙法蓮華經これなり。「一切智地」、

即ち一念三千なり。今、末法に入つて「一切智地」を弘通

するは、日蓮等の類いこれなり。しかるに、「一」とは一念

なり、「切」とは三千なり。一心より松よ桜よと起こるは、

「切」なり。これは心法に約する義なり。色法にては、手足

等は「切」なり。一身なるは「一」なり。詮ずるところ、色心

の二法、「一切智地」にして南無妙法蓮華經なり云々。

いち いっさいちじ しじ
一、「一切智地」の四字

この「一切智地」の四字に、ほけきよういちぶはちかんもんくく法華経一部八卷文々句々を

おき収めたり。この「一切智地」とは、「三諦、一諦、三にあら

ず、一にあらず」なり。い三智に約すれば空智なり。さては三諦

とは云い難し。い がたしかりといえども、三諦一諦の中の空智な

り。さんたいされば、三諦において三三九箇の三諦有り。まず空諦に

て三諦を云う時は、さんたい い とき空諦と呼び出だすは仮諦、くうたい空諦なるは

空諦なり。くうたい不二するは中道なり。ふに三諦同じく、ちゆうどうかくのごと

こころく心得べきなり。

せん

いつさいちじ

くしきほつしよう

こころう

詮ずるところ、この「一切智地」をば、九識法性と心得

くしきほつしよう

めいごふに

ぼんしよういちによ

くう

べきなり。九識法性をば、迷悟不二・凡聖一如なれば、空

い

むふんべつちこう

くう

い

くしきほつしよう

と云うなり。無分別智光を空と云うなり。この九識法性と

ところ

ほうかい

さ

ほうかい

じっかい

じっかい

は、いかなる処の法界を指すや。法界とは十界なり。十界

そくしよほう

しよほう

とうたい

ほんぬ

みようほうれんげきよう

即諸法なり。この諸法の当体、本有の妙法蓮華経なり。こ

じゆう

まよ

しゆじよう

いちぶつげん

ふんべつせつさん

ふんべつ

の重に迷う衆生のために、一仏現じて「分別説三（分別し

さん

と

くしきほんぼう

みやこ

た

い

て三を説きたもう」するは、九識本法の都を立ち出ずる

ついで

もと

くしき

いんにゆう

ほけきよう

なり。さて、終に本の九識に引入する、それを法華経とは

い

いつさいちじ

いつさいちじ

われ

云うなり。「一切智地」とは、これなり。「一切智地」は我ら

しゅじよう しんぼう しんぼうすなわ みようほう いっさいちじ

衆生の心法なり。心法即ち妙法なり。「一切智地」とは、

うんぬん

これなり云々。

いち こんきようしよう こと

一、「根茎枝葉」の事

おおい い もん しゃく しん かい じよう え

仰せに云わく、この文をば、釈には「信・戒・定・慧」

うんぬん しゃく ところ そうもく

云々。この釈の心は、草木はこの「根茎枝葉」をもつて

ぞうちよう い ぶつぼう しゅぎよう

増長と云うなり。仏法を修行するも、またかくのごとし。

せん われ しゅじよう ほけきよう しん たてまつ ね

詮ずるところ、我ら衆生、法華経を信じ奉るは、根をつ

ほけきよう もん ぜみようじかい

けたるがごとし。法華経の文のごとく「是名持戒（これを

かい たも な かいたい ほん しょうじきしゃほうべん たん

戒を持つと名づく）の戒体を本として、「正直捨方便 但

せつむじようどう

ししようじき

ほうべん

す

むじようどう

と

説無上道（正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ）

かい

ほけきよう

もんそう

ほつけざんまい

のごとくなるは戒なり、法華経の文相にまかせて法華三昧

しゆ

じよう

だいもく

とな

たてまつ

え

を修するは定なり、題目を唱え奉るは慧なり。いわゆる、

ほうかい

ししようじゆういめつ

しん ここ

ほんぶん

かい

さんぜ

法界ことごとく生住異滅するは信、己々の本分は戒、三世

ふかい

じよう

おのおの

とくぎ

あらわ

え

不改なるは定なり、各々の徳義を顕したるは慧なり。こ

すなわ

ほうかいびじようどう

こんきようししよう

すなわ

しんによじつそう

れ即ち法界平等の「根茎枝葉」なり。これ即ち真如実相

ふ ま

かい

じよう

え

さんがく

みようほうれんげきよう

の振る舞いなり。いわゆる戒・定・慧の三学は妙法蓮華経

しん

こん

い

しゃく

い

さんがく

なり。これを信ずるを「根」と云うなり。釈に云わく「三学

つた

な

みようほう

い

うんぬん

をとともに伝うるを、名づけて妙法と曰う」云々。

いち こんきようしよう こと

一、「根茎枝葉」の事

おほ い われ いっしん こん しんぼう

仰せに云わく、これは我らが一身なり。「根」とは心法

なり、「茎」とは我らが頭より足に至るまでなり、「枝」

とは手足なり、「葉」とは毛なり。この四つを「根茎枝葉」

と説けり。法界三千、この四つを具足せずということなし。

これ即ち「信・戒・定・慧」の体にして、実相一理の

なんみようほうれんげきよう たい ほつけふしん ひと こんきようしよう

南無妙法蓮華経の体なり。法華不信の人は「根茎枝葉」あ

りて増長あるべからず。「枯槁衆生（枯槁の衆生）」なる

べし云々。

うんぬん

ぞうちよう

こんきようしよう

うんぬん

うんぬん

うんぬん

いち こころうしゅじょう こころう しゅじょう こと

一、「枯槁衆生（枯槁の衆生）」の事

おほ い ほけきょう たも たてまつ もの こころうしゅじょう

仰せに云わく、法華經を持ち奉る者は「枯槁衆生」

すで ほけきょう しゅし じゅじ たてまつ ゆえ

にあらざるなり。既に法華經の種子を受持し奉るが故な

ほうぼうふしん ひと げしゅな ゆえ こころうしゅじょう

り。謗法不信の人は下種無きが故に、「枯槁衆生」なり。

みょうらくだいしい よきょう たね

されば、妙楽大師云わく「余教をもつて種となさず」。

いち どううほうう ひと ほう あめ ふ ひと のり あめふ

一、「等雨法雨（等しく法の雨を雨らす）（等しき法の雨雨る）」

こと

の事

おほ い どう びょうどう ぜんにん あくにん

仰せに云わく、「等」とは、平等のことなり。善人・悪人、

にじよう せんだい しょうけん じゃけんとう もの みょうほう あめ お

二乗・闡提、正見・邪見等の者にも、妙法の雨を惜しま

ず平等にふらすということなり。されば、「法の雨を雨ら

とき

だいかくせそん 雨

手 な

す」という時は、大覚世尊ふらしてに成りたまえり。さて

のり あめ

とき

もと

じつそうびようどう

ほうう

「法の雨ふりて」とよむ時は、本より実相平等の法雨は、

じようじゆうほんぬ あめ

いまはじ

常住本の雨なれば、今始めてふるべきにあらず。され

しよほうじつそう

ひ ゆほん

とき

ふうげつ

たと

みようらくだいし

ば、諸法実相を、譬喩品の時は風月に譬えたり。妙楽大師

なん

かく

なん

あらわ

しゃく

じようじゆう

じつそう

は「何ぞ隠れ、何ぞ顕れん」と釈せり。常住なり。実相

ほうう

さんぜじようどう

おんけん

な

せん

の法雨は三世常恒にして、隠顕さらに無きなり。詮ずると

とう

じ

とき

しやかによらい

びようどう

ころ、「等」の字は、「ひとしく」とよむ時は、釈迦如来の平等

じひ

とき

びようどうだいえ

の慈悲なり。さて、「ひとしき」とよむ時は、平等大慧の

みようほうれんげきよう

ひと ほう あめ

のうぐ

妙法蓮華経なり。「等しく法の雨をふらす」とは、能弘に

ひと のり あめ

よ とき

しよぐ ほう

つけたり。「等しき法の雨ふりたり」と読む時は、所弘の法

せん

ほう

じっかい しよほう

あめ

なり。詮ずるところ、「法」というは、十界の諸法なり。「雨」

じっかい

ごんごおんじよう

ふ ま

じざい

とは、十界の言語音声の振る舞いなり。「ふる」とは、自在

じごく

どうねんみようか

ないしぶっかい

かみ

しよさ

おんじよう

にして、地獄は洞燃猛火、乃至仏界の上の所作・音声を、

どううほうう

と

「等雨法雨」とは説けり。

どううほうう

ほったい

なんみようほうれんげきよう

いま

この「等雨法雨」の法体は、南無妙法蓮華経なり。今、

まっぼう

い

にちれんら

たぐ

ぐつう

だいもく

どううほうう

末法に入つて日蓮等の類いの弘通する題目は、「等雨法雨」

ほったい

ほうう

じごく

しゆじよう

がき

ちくしようつう

の法体なり。この「法雨」、地獄の衆生・餓鬼・畜生等に

いた どうじ ほうろう にほんこく いっさいしゆじよう

至るまで、同時にふりたる「法雨」なり。日本国の一切衆生

ふぞく たも ほうう だいもく ごじ

のため付嘱し給う「法雨」は、題目の五字なり。いわゆ

にちれんこんりゆう ごほんぞん なんみようほうれんげきよう

る、日蓮建立の御本尊、南無妙法蓮華經これなり云々。

ほうべんぼん ほんまつくきようとう い ひゆほん

方便品には「本末究竟等」と云えり。譬喩品には「等一大車

とういち だいしや い とう じ かさ と

(等一大車)と云えり。この「等」の字を重ねて説かれ

によがとうむい わ ひと こと

たり。あるいは「如我等無異(我がごとく等しくして異な

い とう じ ほうとうほん

ることなし)と云えり。この「等」の字は、宝塔品の「如

ぜ によぜ おな せん

是、如是(かくのごとし、かくのごとし)と同じなり。詮ず

なんみようほうれんげきよう ほう あめ

るところ、「等」とは、南無妙法蓮華經なり。「法の雨をふ

らすこんじんとは、今身よりぶつしん仏身にいた至るまでたも持つやいな否やとい云うじゆじ受持
の言語ごんごなり云々。うんぬん

一、「等雨法雨いち（等しくとううほうう法の雨をひと雨らす）（等しきほう法の雨雨る）あめ」
ふ ひと のり あめふ

の事こと

仰せおおに云いわく、この時ときは、妙法実相みょうほうじつそうの法雨ほううは十界三千じっかいさんぜん、

下しもは地獄じごく、上かみは非想非非想ひそうひひそうまで、横よこに十方じっぼう、豎たてに三世さんぜに亘わたつ

て妙法みょうほうの功德くどくふるを、「等とう」とは云いうなり。さて「雨ふる」

とは、一切衆生いっさいしゆじようの色心しきしん、妙法蓮華經みょうほうれんげきようと三世常住さんぜじようじゆうにふる

なり云々。うんぬん

いちぎ い 一義に云わく、この妙法の雨は、九識本法の法体なり。
みようほう あめ くしきほんほう ほつたい

しかるに、一仏現前して説き出だすところの妙法なれば、
いちぶつげんぜん と い

「法の雨をふらす」と云うなり。その故は、「ふらす」とい
ほう あめ い ゆえ

うは、上より下へふるを云うなり。よつて、従果向因の義な
かみ しも い じゅうかこういん ぎ

り。仏に約すれば、第十の仏果より九界へふらす。法体
ほとけ やく だいじゅう ぶつか きゅうかい ほつたい

にては、ふる処もふらす処も真如の一理なり。識分にて
ところ ところ しんによ いちり しきぶん

は、八識へふり下りたるなり。しかれば、今、日蓮等の類い、
はつしき くだ いま にちれんら たぐ

南無妙法蓮華経を日本国の一切衆生の頂上にふらすを、
なんみやうほうれんげきやう にほんこく いっさいしゆじやう ちやうじやう

「法の雨をふらす」と云うなり云々。
ほう あめ い うんぬん

いち い によじゆうけ こくらい こつぐ だいおうぜん う くに きた

一、「如從飢国来 忽遇大王膳（飢えたる国より来つて、た

だいおう ぜん あ

ちまちに大王の膳に遇うがごとし）」の事 こと

おお い もん ちゆうこん しだい しょう もん ほっけ きた

仰せに云わく、この文は中根の四大声聞、法華に來れ

たと 飢 くに きた だいおう 供 あ

ること、譬えばうえたる国より来つて大王のそなえに値う

かんき い もん

がごとくの歡喜なりと云えり。しかれば、この文のごとく

ほっけ いぜん ひと がき かい しゆ じょう すで け こく らい

ならば、法華已前の人は餓鬼界の衆生なり。既に「飢国来」

と だいおう ぜん だいご み ちゆうこん しょう もん ほっけ

と説けり。「大王膳」とは、醍醐味なり。中根の声聞、法華

きた いち じょう だいご ほうみ え ほうおう くらい

に來つて、一乗醍醐の法味を得て、たちまちに法王の位に

そな こつ じ にぜん うえ どう き たい こつ

備わりたり。「忽」の字は、爾前の迂廻道の機に對して「忽」

と云うなり。い速疾頓成そくしつとんじょうの義ぎを、「忽」こつと云うなり。いたとい、

げゆう はつそう とな しよけ ぶつどう すす

外用の八相を唱うることあるも、所化しよけをしてぶつどう仏道に進まし

せん まつぼう い ほうぼう

めんがためなり。詮ずるところ、末法まつぼうに入つては、ほう法の

ひとびと がきかい しゆじよう きよう あ たてまつ

人々は餓鬼界がきかいの衆生しゆじようなり。この経きように値あい奉たてまつり、

なんみようほうれんげきよう あ たてまつ だいおうぜん

南無妙法蓮華経なんみようほうれんげきように値あい奉たてまつることは、しかながら「大王膳」

たり。

こつぐ ぐ じ かんよう しやく い じようぶつ

「忽遇」の「遇」の字、肝要かんようたり。釈しやくに云いわく「成仏じようぶつの

難かたきにはあらず。この経きように値あうをかたしとす」と云いえり。

難かたきにはあらず。この経きように値あうをかたしとす」と云いえり。

ふきようほん い ぶ ぐ じようふきよう じようふきよう あ うんぬん

不軽品ふきようほんに云いわく「復遇常不軽ぶぐじようふきよう（また常不軽じようふきように遇あう）」云々うんぬん。

ごんのうほん

い

しょうちぶつぼう

う

ぶつぼう

あ

うんぬん

嚴王品に云わく「生値仏法（生まれて仏法に値えり）」云々。

だいおうぜん

あ

もつと

なんみようほうれんげきよう

しん

「大王膳」に値いたり。最ももつて、南無妙法蓮華経を信

じゆ

たてまつ

受し奉るべきなり。

きようもん

ほつけ

ほか

いっさいしゆじよう

この経文のごとくならば、法華より外の一切衆生は、

こうき

ひと

がきどう

しゆじよう

じゆうらせつによ

いかに高貴の人なりとも、餓鬼道の衆生なり。十羅刹女は

がきかい

らせつ

ほけきよう

じゆじ

たてまつ

ゆえ

がき

餓鬼界の羅刹なれども、法華経を受持し奉るが故に、餓鬼

そく

いちねんさんぜん

ほつけ

きた

がき

に即する一念三千なり。法華へ来らずんば、いずれも餓鬼・

ききん

くる

せん

かなら

ちゆうこん

しょうもん

飢饉の苦しみなるべし。詮ずるところ、必ず、中根の声聞、

りようげ

ことば

わ

み

がき

るい

がき

ほうかい

じき

領解の言に我が身を餓鬼に類することは、餓鬼は法界に食

しよく

え

しよほうじつそう

いちみ

ありといえども食することを得ざるなり。諸法実相の一味

だいご

みようほうあ

つい

かいかく

た

の醍醐の妙法有れども、終に開覚に能えざるあいだ、

しんじゆうよねん

じき

飢

うんぬん

四十余年、食にうえたり云々。

いちぎ

い

じよほん

ほうべん

しよほうじつそう

かんろあらわ

一義に云わく、序品・方便より諸法実相の甘露顕れて

なんみようほうれんげきよう

こうりやくにじゆう

ひせつだん

さと

南無妙法蓮華経あれども、広略二重の譬説段まで悟らざれ

がき

まんまん

しよくじ

せん

ば、餓鬼の満々とある食事をくらわざるがごとし。詮ずる

にほんこく

いつさいしゆじよう

がきかい

しゆじよう

だいおうぜん

ところ、日本国の一切衆生は餓鬼界の衆生なり。「大王膳」

なんみようほうれんげきよう

ぐ

じ

にんぼう

とは、いわゆる南無妙法蓮華経これなり。「遇」の字には人法

おき

まつ

によけしゆきようじき

う

おし

ま

を納めたり。よつて、末に「如飢須教食（飢えて教えを須

しよく

つて食するがごとし」と云えり。うえたるとも大王のお

飢

だいおう

ま だいご じよく

しえを待つて醍醐を食するがごとしと云えり。今、

いま

なんみようほうれんげきようあ

こんじん

ぶっしん

いた

じゆじ

南無妙法蓮華経有れども、今身より仏身に至るまでの受持

じようぶつ

あ

きよう

に

をうけずんば、成仏はこれ有るべからず。「教」とは、「爾

ぜんむとくどう

ほつけじようぶつ

おし

前無得道、法華成仏」のとなり。この教えをうけずんば、

ほけきよう

どくじゆ

だいおう

くらい

のほ

法華経を讀誦すとも大王の位に登ること、これあるべから

だいご

だいまく

ごじ

うんぬん

ず。醍醐は題目の五字なり云々。

いち

だいつうちしようぶつ

じつごうぎどくじよう

ぶつぼうふげんぜん

ふとくじようぶつどう

一、「大通智勝仏 十劫坐道場 仏法不現前 不得成仏道

だいつうちしようぶつ

じつごうどうじよう

ぶ

ぶつぼう

まえ

げん

(大通智勝仏は、十劫道場に坐したまえども、仏法は前に現

ぜず。仏道を成なりずることを得えたまわらず」の事こと

仰おほせに云いわく、この経文は一切衆生の本法流転を説と

かれたり。されば、釈しゃくにも出世以前と判はんぜり。これは、

大通仏出世し給たまえども、十小劫の間、一経も説き給たまわらず

という経文なり。よつて、「仏法不現前」の故に、「不得成仏」

と云いえり。されども、釈しゃくを見るに出世以前という時は、こ

の経文はいかなることぞ。これは本法の重を説かれたり。

一仏出世すれば、流転門となる。一仏も出世無き時は、本法

不思議の体なり。迷・悟もなく、生・仏もなく、成仏も

ふじようぶつ

ふとくじようぶつどう

い

なく不成仏もなきなり。よつて、「不得成仏道」と云えり。

ほんぼう

もう

みず

ひ

そもそも本法と申すは、水があつくなり、火がつめたくな

るてんもん

みず

ひ

らば流転門なるべし、水はいつもつめたたく火はいつもあつ

じごく

かえん

がき

けかち

ほか

ばんぼうここ

く、地獄はいつも火焰、餓鬼はいつも飢渴、その外、万法己々

とうい

とうい

ほんぼう

たい

い

じゆう

の当位は当位のままなるを本法の体と云うなり。この重を

と

あらわ

きようもん

説き顕したる経文なり。

ほんぼう

じゆう

ほけきよう

ごんきよう

るてん

この本法の重は法華経なり、権教は流転なり。この

るてん

しゅじよう

ほんぼう

じゆう

ひい

ほとけ

しゅつせ

流転の衆生を本法の重に引き入れんとての仏の出世な

ほんぼう

きよう

せん

り。その本法というは、この経なり。詮ずるところ、この

きようもん ほんぼう

だいつうちしようぶつ

われ しゆじよう しき

経文の本法とは、「大通智勝仏」といふは、我ら衆生の色

しん じつかい

じつかい

ぎどうじよう

心なり。「十劫」といふは、十界なり。「坐道場」といふは、

じつかい じゆうしよ

どうじよう

どうじよう

じやつこうど

十界の住処そのまま道場なり。道場なれば、寂光土なり。

ほうかい じやつこうど

じつかい

しゆじよう

しよほうじつそう

ほとけ

法界は寂光土にして十界の衆生ことごとく諸法実相の仏

いちぶつげん

まよ

しゆじような

と

なれば、一仏現ずべきにあらず。迷いの衆生無ければ、説

ほう な

ぶつぼう ふげんぜん

い

ふとく

くべき法も無し。よつて、「仏法不現前」と云えり。「不得

じようぶつじよう

しかく

ほんがく

じようぶつ

ほんぼう

成仏道」とは、始覚・本覚の成仏ということもなし。本法

ふしぎ

たい

ばんぼうほんぬ

しやく

不思議の体にして万法本有なり。これによつて、釈には

しゆつせいぜん

ほん

出世以前と判ぜり。

しかれば、その本法の体とは、詮ずるところ、

なんみようほうれんげきよう

ほんぼう

ないしよう

ひ

い

南無妙法蓮華経なり。この本法の内証に引き入れんがため

ほとけ

しじゅうよねんゆういん

つい

だいごじ

ほんぼう

と

に、仏は四十余年誘引し、終に第五時の本法を説きたまえ

いま

まつぼう

い

じようぎようしよでん

ほんぼう

なんみようほうれんげきよう

り。今、末法に入つて、上行所伝の本法の南無妙法蓮華経

ひろ

たてまつ

にちれん

せけん

しゅつせ

さんじゅうにさい

を弘め奉る日蓮、世間に出世すといえども、三十二歳ま

だいもく

とな

い

ぶつぼうふげんぜん

ではこの題目を唱え出ださざるは、「仏法不現前」なり。こ

みようほうれんげきよう

ひろ

つい

ほんぼう

ないしよう

ひ

い

の妙法蓮華経を弘めて、終には本法の内証に引き入るる

にちれん

だいつうちしよぶつ

にほんこく

いっさい

なり。日蓮、あに「大通智勝仏」にあらずや。日本国の一切

しゅじよう

じつこうぎどうじよう

じつこうぎどうじよう

ぎ

じっかい

衆生こそ「十劫坐道場（十劫道場に坐す）」とて、十界そ

ほんぼう なんみようほうれんげきよう ひ い せん

のまま本法の南無妙法蓮華経へ引き入るるなり。詮ずると

しんじん い なんみようほうれんげきよう と な たてまつ

ころ、信心を出だして南無妙法蓮華経と唱え奉るべきも

うんぬん

のなり云々。

いち びんにんけんししめ ごしんだいかんぎ びんにん たま み こころ

一、「貧人見此珠 其心大歡喜(貧人はこの珠を見て、その心

おほ かんぎ こと

は大いに歡喜す)」の事

おほ い ししめ いちじようむげ ほうしゆ

仰せに云わく、「此珠」とは、一乗無価の宝珠なり。

びんにん げこん しょうもん そう いっさいしゆじよう

「貧人」とは、下根の声聞なり。総じては一切衆生なり。

せん せい まつぼう い ししめ なんみようほうれんげきよう

詮ずるところ、末法に入つて、「此珠」とは南無妙法蓮華経

びんにん にほんこく いっさいしゆじよう だいもく と な

なり、「貧人」とは日本国の一切衆生なり。この題目を唱え

たてまつ もの

しんだいかんぎ

けんほうとう

ほうとう

み

奉る者は、「心大歡喜」せり。されば、「見宝塔（宝塔を見

けんししゆ

おな

せん

し

る」と「見此珠」とは同じきことなり。詮ずるところ、「此

しゆ

われ

しゆじよう

いっしん

いちねんさんぜん

きよう

珠」とは、我ら衆生の一心なり、一念三千なり。この経に

あ

たてまつ

とき

いちねんさんぜん

ひら

たま

み

い

値い奉る時、一念三千と開くを、「珠を見る」とは云うな

り。

たま

ひろ

いっさいしゆじよう

しんぼう

たま

この「珠」は広く一切衆生の心法なり。この「珠」は

たいちゆう

ざいゆう

いっしん

さんぜんぐそく

たから

ぐそく

体中にある財用なり。一心に三千具足の財を具足せり。

たま

ほうべんぼん

しよほうじつそう

と

ひゆほん

この「珠」を、方便品にして諸法実相と説き、譬喩品にて

だいびやくごしや

さんそうにもく

ごひやくゆじゆん

ほうとう

とも

みないっしゆ

は大白牛車、三草二木、五百由旬の宝塔、共に皆一珠の

みようほうれんげきよう

ほうしゆ

きようもん

しきしん

じつそう

かんき

と

妙法蓮華経の宝珠なり。この経文、色心の実相の歡喜を説

けり。見此珠の「見」は、色法なり。「其心大」と云う

けん ししゆ

けん

しきほう

ごしんだい

い

は、心法なり。色心共に歡喜なれば、「大歡喜」と云うなり。

せん

しんぼう

かんき

だいかんぎ

い

詮ずるところ、「此珠」というは、我ら衆生の心法なり。

いちねんさんぜん

ほうしゆ

みようほうれんげきよう

よつて、一念三千の宝珠なり。いわゆる妙法蓮華經なり。

いま

まつだい

い

たま

あらわ

にちれんら

たぐ

今、末代に入つてこの珠を顕すことは、日蓮等の類い

みぞう

だいまんだら

まさ

いちねんさんぜん

なり。いわゆる未曾有の大曼荼羅こそ、正しく一念三千の

ほうしゆ

けん

じ

にほんこく

いっさいしゆじよう

ひろ

いちえんぶだい

宝珠なれ。「見」の字は、日本国の一切衆生、広くは一閻浮提

しゆじよう

ごしんだいかんぎ

い

とき

の衆生なり。しかりといえども、「其心大歡喜」と云う時は、

にちれん

でしだんなとう

しんじや

せん

ほんのうそく

日蓮が弟子檀那等の信者をさすなり。詮ずるところ、煩惱即

ぼだい しょうじそくねはん たいだつ

ごしんだいかんぎ

菩提・生死即涅槃と体達するが、「其心大歡喜」なり。され

われ しゅじょう ごひやくじんてん げしゆ たま うしな ごどう ろくどう

ば、我ら衆生、五百塵点の下種の珠を失つて、五道・六道

りんね びんにん ちか さんぜんじんてん げしゆ す

に輪廻し、貧人となる。近くは三千塵点の下種を捨てて「備

りんしよどう しょどう めぐ びんにん

輪諸道（つぶさに諸道を輪る）せり。これによつて貧人と

な いま たま しゃくそん あ たてまつ みつ え もと

成る。今この珠を釈尊に値い奉つて見付け得て、本のご

と え ゆえ しんだいかんぎ

とく取り得たり。この故に、「心大歡喜」せり。末法当今に

みようほうれんげきよう ほうしゆ じゆじ たてまつ こしん み

おいて、妙法蓮華經の宝珠を受持し奉つて己心を見るに、

じっかいごご ひゃっかいせんによ いちねんさんぜん ほうしゆ ふんみよう ぐそく

十界互具・百界千如・一念三千の宝珠を分明に具足せり。

まつぼう ようほう だいもく うんぬん

これ、しかしながら末法の要法たる題目なり云々。

いち によかんろけんかん かんろ そそ こと

一、「如甘露見灌（甘露もて灌がるるがごとし）」の事

おほ い かんろ てんじよう かんろ

仰せに云わく、「甘露」とは、天上の甘露なり。され

みようらくだいしい じつそうじようじゆう かんろ

ば、妙楽大師云わく「実相常住は甘露のごとし。これ不死

くすり うんぬん しゃく こころ しょうじつそう ほつたい かんろ

の薬なり」云々。この釈の心は、諸法実相の法体をば甘露

たと かんろ ふし くすり い せん

に譬えたり。甘露は不死の薬と云えり。詮ずるところ、妙

ふし くすり こころ ふし ほうかい さ

とは不死の薬なり。この心は、不死とは法界を指すなり。

ゆえ しんちさんぜん ぼんぼう ふしぎ たん しょうじゆういめつ

その故は、森羅三千の方法を不思議と歎じたり。生住異滅

とういとうい さんぜじようじゆう ふし い ほんぼう とく

の当位当位、三世常恒なるを不死と云う。本法の徳として、

みず 下 冷 上 熱 水はくんだりつめたたく、火はのぼりあつし。これを妙と云う。

みず 下 冷 上 熱 水はくんだりつめたたく、火はのぼりあつし。これを妙と云う。

すなわ 富士ぎ
これ即ち不思議なり。この重を不死とは云うなり。

かんろ みようほう おな
「甘露」と妙とは同じことなり。しかれば、法界のま

まに閣いて妙法なりと説くを、本法とも甘露とも云えり。

ひ みず 消 ほんぼう
火は水にきゆる、本法にして不死なり。十界己々の当位当位

ふ ま じようじゆうほんぬ
の振る舞い、常住本有なるを、甘露とも、妙法とも、

ふしぎ ほんぼう しかん せい
不思議とも、本法とも、止観とも云えり。詮ずるところ、末法

い かんろ なんみようほうれんげきよう けんかん
に入つて「甘露」とは、南無妙法蓮華経なり。「見灌」とは、

じゆじ いちぎよう うんぬん
受持の一行なり云々。

いち にくうあくにんいふぜんしん あくにんあ ふぜん こころ
一、「若有悪人以不善心（もし悪人有つて、不善の心をも

つて) 等の事

仰せおほに云いわく、「悪人あくにん」とは、在世ざいせにては提婆だいば・瞿伽利くぎやり

等とうなり。「不善心ふぜんしん」とは、悪心あくしんをもつて仏ほとけを罵詈めりし奉たてまつる

ことを説とくなり。滅後めつごには、「悪人あくにん」とは弘法こうぼう・慈覚じかく・智証ちしよう・

善導ぜんどう・法然等ほうねんとうこれなり。「不善心ふぜんしん」とは、謗言ぼうごんなり。この謗言ぼうごん

を書き写かしたる十住心論等じゅうじゅうしんろんとう・選択集等せんちやくしゅうとうの謗法ぼうぼうの書しょども

なり。さて、末法まつぼうに入いつて「善人ぜんにん」とは、日蓮等にちれんらの類たぐいな

り。「善心ぜんしん」とは、法華弘通ほつげぐつうの信心しんじんなり。いわゆる

南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきようこれなり云々うんぬん。

いち によぜ によぜ

一、「如是、如是（かくのごとし、かくのごとし）」の事 （一）

おほ い しゃく い ほつそう ぜ によ こんじよう

仰せに云わく、釈に云わく「法相の是に如し、根性の

ぜ によ ほつそう ぜ によ しょうじつそう かさ

是に如するなり。「法相の是に如す」とは、諸法実相を重ね

によぜ と こんじよう ぜ によ くほうかい

て「如是」と説かれたり。「根性の是に如す」とは、九法界

と き ほうとも しゃかによらい しょせつ

を説かれたり。しかれば、機・法共に釈迦如来の所説のご

しんじつ しょうみやう はじ によぜ きやういち

とく真実なりと証明したまえり。始めの「如是」は教一

かいえ つぎ によぜ にないちかいえ こんきやう こころ しょうほう

開会なり、次の「如是」は人一開会なり。権教の意は、諸法

もうほう 嫌 きやくべつ ふゆう おし こんじよう

を妄法ときらいし隔別・不融の教えなり。根性において

しょうよくふどう しゅじゆ せつぼう ひと

は性欲不同なれば、種々に説法したまえり。よつて、人も

じようぶつ

こんきよう

こころ

しよほうじつそう

おんきよう

じっかい

成仏せず。今経の心は、諸法実相の御経なれば、十界

びようぶつ さず

みようほう

こんじよう

ふどう

平等に授けるところの妙法なり。根性は不同なれども、

おな によぜしよう いっしよう

せん

いま まっぼう い

同じく如是性の一性なり。詮ずるところ、今、末法に入つ

ほっそう ぜ によ

とうちゆうそうじよう

ほんぞん

こんじよう

ての「法相の是に如す」は、塔中相承の本尊なり。「根性

ぜ によ

じっかいおんねん

そんぞう

ほっそう

の是に如するなり」といは、十界宛然の尊像なり。「法相」

なんみようほうれんげきよう

こんじよう

にほんこく

いっさいしゆじよう

ひろ

は南無妙法蓮華経なり。「根性」は日本国の一切衆生、広

いちえんぶだい しゆじよう

うんぬん

くは一閻浮提の衆生なり云々。

いち ぜしんぶつし

じゆうじゆんぜんじ

しん ぶつし

じゆんぜん

じ

じゆう

一、「是真仏子 住淳善地（これ真の仏子、淳善の地に住

す）」の事

す）」の事

おほ まつぼうとうこん

しやかによらい しんじつ

仰せに云わく、末法当今において、釈迦如来の真実の

みこ ほけきよう ぎようじや ゆえ かみ もん のう

御子というは、法華經の行者なり。その故は、上の文に「能

おらいせ どくじしきよう よ らいせ きよう よ たも

於来世 讀持此經（能く来世において、この經を讀み持た

と らいせ まつぼう どく

ん」と説けり。「来世」とは、末法なり。「讀」というは、

ほけきよう によせつしゆぎよう ぎようじや こうぼう じかく ちしようとう ぜんどう

法華經の如説修行の行者なり。弘法・慈覺・智証等、善導・

ほうねんとうよ い だいさん れつ けろん ほう しゃへいかくほう り

法然等讀んで云わく「第三の劣」「戲論の法」「捨閉閣抛」「理

どうじしよう とう よ ほうぼう さんぶつ おんした き

同事勝」等と讀むは、謗法にして三仏の御舌を切るにあら

ずや。いかにいわんや持たんをや。伝教大師云わく「法華經

ほ たも だんぎようだいしい ほけきよう

を讚むといえども、還つて法華の心を死す」とは、これな

かえ ほつけ こころ こころ

り。

いま にちれんら たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ ひと
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る人は、

どくじしきよう ひと
「読持此経」の人なり。あに「是真仏子」にあらずや。「淳
じゆん

ぜんじ じゃつこうど
善地」は寂光土にあらずや。「是真仏子」の「子」の字は十界
じゅうがい

しゆじよう せん
の衆生なり。詮ずるところ、この「子」の字は法華経の行者
ぎやうじや

かぎ しつぜごし
に限る。「悉是吾子（ことごとくこれ吾が子なり）」の「子」
し

こう ふこう ふんべつ こ がとうかいじぶつし われ
は、孝・不孝を分別せざる子なり。「我等皆似仏子（我らは
われ

みなぶつし に し ちゆうこん しようもん ぶつし に
皆仏子に似たり）」の「子」は、中根の声聞は仏子に似た
に

と いじおうじこ おうじ じ ゆえ
りと説かれたり。「為治狂子故（狂子を治せんがための故に）」
ゆえ

の「子」は、久遠の下種を忘れたれば、物にくるう子なり。

よつて、釈尊の御子にも、物にくるう子もあり、不孝の子

もあり、孝養の子もあり。いわゆる、法華經の行者は眞実

の釈尊の御子なりと、釈迦、多宝、分身三千三百萬億那由

他の世界に充滿せる諸仏の御前にして、孝・不孝の子を定

めおきたまえり。父の業をつぐをもつて子とせり。

三世の諸仏の業とは、南無妙法蓮華經これなり。法師品

に「行如来事（如来の事を行ず）」と説けり云々。法華經

は母なり、釈尊は父なり、我ら衆生は子なり。無量義經に

い しょぶつこくおうぜきようぶにんわごう ぐしようぜぼさつし しょぶつ こくおう
云わく「諸仏国王是経夫人和合、共生是菩薩子（諸仏の国王

きよう ぶにん わごう とも ぼさつ こ しょう
とこの経の夫人と和合して、共にこの菩薩の子を生ず」。

ぼさつ ほけきよう ぎようじや ほつしほん い ざいけ
「菩薩」とは、法華経の行者なり。法師品に云わく「在家・

しゆつけぎようぼさつどう ざいけ しゆつけ ぼさつ どう ぎよう うんぬん
出家行菩薩道（在家・出家にて菩薩の道を行ず）」云々。

いち ひくしよせん ひしんしよしき くの こと
一、「非口所宣、非心所測（口の宣ぶるところにあらず、心

ほか
の測るところにあらず）」の事

おほ い ひくしよせん しきほう ひしんしよしき しんぼう
仰せに云わく、「非口所宣」は色法、「非心所測」は心法

しきしん にほう たいかい きようけ しゆじよう
なり。色心の二法をもつて大海にして教化したる衆生を

せんしき い まつ いた こうどうしよぐんじよう
宣測するにあらずと云えり。末に至つては、「広導諸群生

ひろ もろもろ ぐんじよう みちび
(広く諸の群生を導く)と説かれたり云々。
うんぬん

いち ふぜんせけんほう によれんげさいすい じゆうじにゆじゆつ せけん ほう そ
一、「不染世間法 如蓮華在水 從地而涌出(世間の法に染

まらざるごと、蓮華の水に在るがごとし。地よりして涌出す)」
れんげ みず あ じ ゆじゆつ

の事 こと

おほ い せけんほう まった とんよくとう ぜん
仰せに云わく、「世間法」とは、全く貪欲等に染せら

れず。譬えは、蓮華の水の中より生ずれども、淤泥にそま
たと れんげ みず なか しよう おでい 染

ざるがごとし。この「蓮華」というは、地涌の菩薩に譬え
れんげ ほつしよう だいち せん じゆ ぼさつ たと

たり。「地」とは、法性の大地なり。詮ずるところ、法華経
じ ほつしよう だいち せん ほけきよう

の行者は、蓮華の泥水に染まざるがごとし。ただ「唯一大事」
ぎようじや れんげ でいすい そ ゆいいちだいじ

なんみようほうれんげきよう

ほん

せけんほう

の南無妙法蓮華經を弘通するを本とせり。「世間法」とは、

こくおう

だいじん

しよりよう

たま

かんい

たま

国王・大臣より所領を給わり官位を給わるとも、それには

ぜん

ほうぼう

くよう

う

ふぜんせけんほう

染せられず、謗法の供養を受けざるをもつて、「不染世間法」

い

せん

れんげ

みず

しやうちよう

とは云うなり。詮ずるところ、蓮華は水をはなれて生長せ

すい

なんみようほうれんげきよう

ほんげ

ぼさつ

ず。「水」とは、南無妙法蓮華經これなり。本化の菩薩は、

れんげ

かこくおん

このかた

ほんぼうしよじ

ぼさつ

「蓮華」のごとく、過去久遠より已来、本法所持の菩薩な

れんげさいすい

せん

すい

り。「蓮華在水」とは、これなり。詮ずるところ、この「水」

われ

ぎようじや

しんじん

れんげ

ほんいんほんが

みようほう

とは、我ら行者の信心なり。「蓮華」は、本因本果の妙法

しんじん

すい

みようほうれんげ

しやうちよう

じ

われ

なり。信心の水に妙法蓮華は生長せり。「地」とは、我ら

しゅじよう しんじ

ゆじゆつ

こうせんるふ

とき

いちえんぶだい

衆生の心地なり。「涌出」とは、広宣流布の時、一閻浮提の

いっさいしゅじよう

ほけきよう

ぎようじや

ゆじゆつ

い

一切衆生、法華經の行者となるべきを、「涌出」とは云う

うんぬん

なり云々。

いち

がんばつい みらい

えんぜつりようかいげ

ねが

ほとけ

みらい

一、「願仏為未来 演説令開解（願わくは、仏は未来のた

えんぜつ

かいげ

こと

めに、演説して開解せしめたまえ」の事

おお

い

もん

みろくぼさつとう

まつぼうとうこん

仰せに云わく、この文は、弥勒菩薩等、末法当今のた

がじゆうく おんらい

きようけぜ とうしゆ

われ くおん

このかた

めに、「我従久遠来 教化是等衆（我は久遠より来、こ

しゆ きようけ

ことば

えんぜつりようかいげ

れらの衆を教化せり）」の言を「演説令開解」せしめたま

しよう

たてまつ

きようもん

しようもん

じゆりようほん

えと請じ奉る経文なり。この請文において寿量品は

あらわ ごひやくくじんでん くおん ほうもん

頭あれたり。五百塵点の久遠くおんの法門ほうもんこれなり。「開解かいげ」とは、

きようしゆしやくそん ごないししよう

教主ぶん釈尊ねがの御内証おなにこの分ぶんをおさえたまうを、「願ねがわくは

ひら おな いちえ だいしゆ うたが と

開ひらかしたまえ。同じく一会の大衆おなの疑いちえいをも解だいしゆかした

ししよう かいげ ことば じゆりようほん

まえ」と請ししようずるなり。この「開解かいげ」の語ことばを、寿量品じゆりようほんにし

によとうとうしんげ によとう まさ しんげ いまし

て「汝等によとう当信解まさ（汝等しんげは当いましに信解いましすべし）」と誠いましめたまえ

かいげ だいしゆ みなほけきよう

り。もし開解かいげしたまわずんば、大衆だいしゆは皆法華経みなほけきようにおいて疑惑ぎわく

ししよう み うたが ししよう さんあくどう お

を生ししようずべしと見たみたまえり。疑うたがいを生ししようぜば三悪道さんあくどうに墮おつべ

すで みろくぼさつもう とき じゆりようほんあらわ

しと、既にすで弥勒菩薩みろくぼさつもう申ときされたり。この時じゆりようほんあらわ、寿量品じゆりようほん頭あらわれず

そくとうだあくどう すなわ まさ あくどう お

んば、「即当そくとうだあくどう墮すなわ悪道まさ（即あくどうち当おに悪道おに墮おつべし）」すべきな

じゆりようほん ほうもん たいせつ
り。寿量品の法門、大切なるはこれなり。

さいて、この「開解」の「開」において二つあり。迹門の
かいげ かい ふた しゃくもん

意は、諸法を実相の一理と会したり。さては、諸法を実相
このろ しゃほう じつそう いちり え しゃほう じつそう

と開いて見れば、十界ことごとく妙法実相の一理なりと開
ひら み じつかい みようほうじつそう いちり ひら

くを、「開仏知見」と説けり。さて、本門の意は、十界本有
かいぶつちけん と ほんもん このろ じつかいほんぬ

と開いて始覚のきずなを解きたり。この重を「開解」と申
ひら しかく 継 と じゆう かいげ もう

されたり。よつて、「演説」の二字は釈尊、「開解」の両字は
えんぜつ に じ しゃくそん かいげ りようじ

大衆なり。この「演説」とは、寿量品の久遠のことなり。
だいしゆ えんぜつ じゆりようほん くおん

終に釈尊、寿量品を説かせたまいて、一切大衆の疑惑を破
ついで しゃくそん じゆりようほん と いっさいだいしゆ ぎわく やぶ

うんぬん
りたまえり云々。

いち ひによろうい ちえそうだつ たと ろうい ちえそうだつ

一、「譬如良医、智慧聡達（譬えば良医の智慧聡達なるがご

とし）」の事

おお い ろうい きようしゆしやくそん ちえ

仰せに云わく、「良医」とは教主釈尊、「智慧」とは

はちまんほうぞう じゅうにぶきよう そうだつ さんぜりようだつ やく

八万法蔵・十二部経なり。「聡達」とは、三世了達なり。「薬」

みようほう ろうやく じゆりようほん こころ じっかいほんぬ

とは、妙法の良薬なり。さて、寿量品の意は十界本有と

だん くすし いっさいしゆじよう

談ぜり。しかれば、この薬師とは、一切衆生のことなり。

ちえ ばんほうごこ じじゅうゆうほうしん ふ ま そう

「智慧」とは、万法己々の自受用報身の振る舞いなり。「聡

だつ じざいじざい ふ ま そうだつ い せん

達」とは、自在自在に振る舞うを「聡達」とは云うなり。詮

まつほうとうこん

じゆりようほん

ほけきよう

ずるところ、末法当今のための寿量品なれば、法華經の

ぎようじや かみ

ちえ

なんみようほうれんげきよう

行者の上のことなり。この「智慧」とは、南無妙法蓮華經

そうだつ

ほんぬむさ さんじん

なり。「聡達」とは、本有無作の三身なりということなり。

がんぼん

むみよう

だいろうやく

なんみようほうれんげきよう

ち

元品の無明の大良薬は、南無妙法蓮華經なり。「智」とは、

いっさいしゆじよう

ちから

え

いっさいしゆじよう

ごんごおんじよう

一切衆生の力なり。「慧」とは、一切衆生の言語音声な

ゆえ

げじゆ

い

が ちりきによぜ

えこうしようむりよう

わ

り。故に、偈頌に云わく「我智力如是 慧光照無量（我が

ちりよく

えこう

て

むりよう

い

智力はかくのごとし。慧光の照らすこと無量なり」と云え

うんぬん

り云々。

いち

いちねんしんげ

こと

一、一念信解の事

仰せおほに云いわく、この経文きようもんは一念三千いちねんさんぜんの宝珠ほうしゆを納めたる

函はこなり。これは現在げんざいの四信ししんの初めはじの一念信解いちねんしんげなり。

さて、滅後めつごの五品ごほんの初めはじの十心具足じっしんぐそく・初随喜品しよざいきほんも一念

三千さんぜんの宝たからを積みたる函はこなり。法華経ほけきようの骨髓こつざい、末法まつぽうにおいて

法華経ほけきようの行者ぎようじやの修行しゆぎようの相貌そうみよう、分明ぶんみやうなり。詮せんずるところ、

信しんと随喜ずいきとは心こころ同じおななり。随喜ずいきするは信心しんじんなり。信心しんじんする

は随喜ずいきなり。一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんは、信心しんじん・随喜ずいきの函はこに納まり

たり。

また、この函はことは、いわゆる南無妙法蓮華経なんみようほうれんげきようこれなり。

また、この函はこは、我われらが一心いっしんなり。この一心いっしんは、万法ばんぼうの総体そうたいなり。総体そうたいは、題目だいもくの五字ごじなり。一念いちねん三千さんぜんと云いうがごとく、
一心いっしん三千さんぜんもあり。釈しゃくに云いわく「介爾けにも心有こころあらば、即すなわち三千さんぜんを具ぐす」。

また、宝函ほうかんとは、我われらが色心しきしんの二法にほうなり。本迹ほんじやく両門りょうもん、
生死しょうじの二法にほう、止觀しかんの二法にほうなり。詮せんずるところ、信心しんじんの函はこに入いれたる南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきょうの函はこなり云々。
うんぬん

一、「見仏聞法けんぶつもんぼう、信受教誨しんじゆきようかい（仏ほとけを見みたてまつり法ほうを聞きいて、

教誨きようかいを信受しんじゆす）」の事こと

おほ

い

きようもん

いちねんずいき

ひと

ごじゆう

仰せに云わく、この経文は、一念随喜の人は五十の

くどく

そな

けんぶつもんぼう

くどく

ぐそく

功德を備うべし。しかるあいだ、「見仏聞法」の功德を具足

ごじつてんでん

ごじゆうにん

くどく

ずいきくどくほん

と

せり。この五十展転の五十人の功德を、随喜功德品に説か

せぜししようじよう

あいだ

けんぶつもんぼう

くどく

そな

れたり。よつて、世々生々の間、「見仏聞法」の功德を備

せん

まつぼう

い

ほとけ

み

えたり。詮ずるところ、末法に入つては、「仏を見る」と

じゆりようほん

しやくそん

ほう

き

なんみようほうれんげきよう

は寿量品の釈尊、「法を聞く」とは南無妙法蓮華経なり。

きようかい

にちれんら

たぐ

きようけ

しよしゆうむとくどう

「教誨」とは、日蓮等の類い教化するところの諸宗無得道

きようかい

しんじゆ

ほけきよう

ぎようじや

の教誡なり。信受するは法華経の行者なり。

せん

じゆりようかいけん

まなこ

あらわ

けんぶつ

詮ずるところ、寿量開頭の眼の顕れては、この「見仏」

は無作の三身なり。「聞法」は、万法己々の音声なり。「信受

きようかい ほんぬずいえんしんによ ふう ま すなわ しきしん

教誨」は、本有随縁真如の振る舞いなり。これ即ち色心の

にほう けん もん しきほう しんじゆ しんじんりようのう

二法なり。「見」「聞」とは、色法なり。「信受」は、信心領納

しんぼう しきしん にほう そな

なれば心法なり。いわゆる、色心の二法に備えたる

なんみようほうれんげきよう うんぬん

南無妙法蓮華経これなり云々。

いち にやくぶ うにん いしつぼうまん ごふくさいた ひとあ

一、「若復有人、以七宝満○其福最多（もしまた人有つて、

しつぼう み ふくもつと おお こと

七宝をもつて満てて○その福最も多し）」の事

おお い きようもん しつぼう さんぜん

仰せに云わく、この経文は、七宝をもつて三千

だいせんせかい み ししやう くよう ほけきやう いちげ じゆじ

大千世界に満てて四聖を供養せんは、法華経の一偈を受持

たてまつ

劣

と

てんだいだいし

しょう

し奉らんにはおとれりと説かれたり。天台大師は生・

よう

じよう

よう

よつ

ぎ

ほけきよう

くどく

しゃく

養・成・栄の四つの義をもつて、法華経の功德を積した

せん

まつぼう

い

だいまく

ごじすなわ

まえり。詮ずるところ、末法に入つては題目の五字即ちこ

みようほうれんげきよう

ごじ

ばんぼうのうしよう

ふぼ

れなり。この妙法蓮華経の五字は万法能生の父母なり。

しょう

よう

じよう

よう

生・養・成・栄も、またまたかくのごときなり。よつて、

しゃく

ほう

ほん

しゃく

さんぜじつぼう

しよぶつ

釈には「法をもつて本となす」と釈せり。三世十方の諸仏

みようほうれんげきよう

ふぼ

ゆえ

ししよう

は、妙法蓮華経をもつて父母としたまえり。この故に、四聖

くよう

ほけきよう

たも

すぐ

しつぼう

せけん

を供養するよりも法華経を持つは勝れたり。七宝は世間の

ざいほう

ししよう

めつ

き

ぶつ

ぼさつ

らかん

みようほう

財宝なり。四聖は滅に帰する仏・菩薩・羅漢なり。さて、妙法

くどく いくとくようふしつ ひと う なが う
の功德は、「一得永不失（一たび得れば永く失せず）」なれば、朽ち失せざる功德なり。この故に勝れたり云々。
く う くどく ゆえ すぐ うんぬん

いち みようおんぼさつ こと
一、「妙音菩薩」の事

おお い みようおんぼさつ じっかい ごごんおんじよう
仰せに云わく、「妙音菩薩」とは、十界の語言音声な

り。この音声ことごとく慈悲なり。菩薩とはこれなり云々。
おんじよう じひ ぼさつ うんぬん

いち に じむじん に ぼさつ とき むじん に ぼさつ こと
一、「爾時無尽意菩薩（その時、無尽意菩薩）」の事

おお い ぼさつ かうけちゆう さんたい に
仰せに云わく、この菩薩は空仮中の三諦なり。「意」の

一字には一切の法門を攝得するなり。「意」というは、中道
いちじ いっさい ほうもん しょうとく にかい ちゆうどう

のことなり。「無」は、空諦なり。「尽」とは、仮諦なり。
む かうたい じん けたい

なんみょうほうれんげきよう

いつさいしよきよう

いわゆる「意」というは、南無妙法蓮華経なり。一切諸経

にさんぜしよぶつにだいもくごじ

せん

の意、三世の諸仏の意は、題目の五字なり。詮ずるところ、

ほつけぎようじやしんじん

に

うんぬん

法華の行者は信心をもつて「意」とせり云々。

いちかんのんみようちりきかんのんみようちちからこと

一、「観音妙智力（観音の妙智の力）」の事

おおいみようふしぎ

ち

ずいえん

仰せに云わく、「妙」とは不思議なり、「智」とは随縁

しんによちりき

しんらさんぜん

じじゆゆうち

かんのん

えん

真如の智力なり。森羅三千の自受用智なり。「観音」は、円

かんえんかん

いちねんさんぜん

かんのん

ほつけ

いみよう

観なり。円観とは、一念三千なり。観音とは、法華の異名な

かんのんほつけ

げんもく

いみよう

しやく

り。「観音と法華とは、眼目の異名なり」と釈するあいだ、

ほけきよういみよう

かん

えんかん

のん

ぶつき

法華経の異名なり。「観」とは円観、「音」は仏機なり。よ

かんのん

にじ にんぽういつたい

いつしんさんがん

つて、「観音」の二字は人法一体なり。いわゆる一心三観・

いちねんさんぜん

うんぬん

一念三千これなり云々。

いち

じぎいしごう

じぎい

ごう

こと

一、「自在之業（自在の業）」の事

おお

い

じぎいしごう

じじゆゆうほうしん

ちりき

仰せに云わく、この「自在之業」とは、自受用報身の智力

しんちさんぜん

しよほう

さごう

指

い

しよさ

なり。森羅三千の諸法の作業をさして云うなり。その所作の

ほけきよう

ごころ

ふしぎ

じぎいしごう

と

まま、法華經の意は不思議の「自在之業」なりと説けり。

じぎいしごう

もと

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

この「自在之業」の本は南無妙法蓮華經これなり云々。

いち

みようほうれんげきようだ

らに

こと

一、「妙法蓮華經陀羅尼」の事

おお

い

みようほうれんげきようだ

らに

しようじきしや

仰せに云わく、「妙法蓮華經陀羅尼」とは、「正直捨

ほうべん たんせつむじようどう しようじき ほうべん す むじようどう と

方便 但説無上道（正直に方便を捨てて、ただ無上道を説

くのみ）なり。五字は体なり、陀羅尼は用なり。妙法の五字

は、我らが色心なり。陀羅尼は、色心の作用なり。

われ しきしん だらに しきしん さよう

詮ずるところ、陀羅尼とは呪なり。妙法蓮華経をもつ

せん だらに じゆ みようほうれんげきよう

て煩惱即菩提・生死即涅槃と呪いたるなり。日蓮等の類い、

ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん まじな にちれんら たぐ

南無妙法蓮華経を受持するをもつて、呪とは云うなり。「若

うのうじ そくじぶっしん よ たも じゆ い すなわ ぶっしん

有能持 即持仏身（もし能く持つことあらば、即ち仏身を

たも 呪 しゃく い だらに しょぶつ

持つ）とまじないたるなり。釈に云わく「陀羅尼とは、諸仏

みつごう はん せん ほっけ しゃくぶく ごんもん

の密号なり」と判ぜり。詮ずるところ、「法華の折伏は権門

の密号なり」と判ぜり。詮ずるところ、「法華の折伏は権門

の密号なり」と判ぜり。詮ずるところ、「法華の折伏は権門

の理を破すり はの義ぎ、「悪を遮り、善を持つ」の義ぎなり云々。
いち ろくまんはっせんにん こと

一、「六万八千人」の事

仰せおおに云いわく、「六」とは、六根ろっこんなり。「万」とは、六根ろっこん

に具ぐするところの煩惱ぼんのうなり。「八」とは、八苦はちの煩惱ぼんのうなり。

「千」とは、八苦はちに具足すなわする煩惱ぼんのうなり。これ即ち、法華經ほけきょう

に値あい奉たてまつって、「六万八千」の功德くどくの法門ほうもんと顯あらわるるなり。

詮せんずるところ、日蓮等にちれんらの類たぐい、南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる

外ほかに、「六万八千」の功德くどくの法門ほうもんこれ無なきなり云々。
いち みょうしょうごんのう こと

一、「妙莊嚴王」の事

仰おほせに云いわく、「邪見じゃけんは即すなわち正しょうなり」の手本てほんなり。詮せん

しんらさんぜん ぼんぼう みよう しょうごん

ずるところ、森羅三千の万法、妙をもつて莊嚴したる王な

みよう しょうたん ことば しょうごん

り。「妙」とは、称歎の語なり。「莊嚴」とは、色法な

のう しんぼう しょうぼう しきしん ふしぎ ほ

り、「王」とは、心法なり。諸法の色心を不思議と歎めたり。

みようしょうごんのう ことば さんぜん しょうぼう さんたい ほつしょう

しかれば、「妙莊嚴王」の言、三千の諸法、三諦・法性の

とうい せん にちれん ら たぐ

当位なるなり。詮ずるところ、日蓮等の類い、

なんみやうほうれんげきやう しきしん しょうごん しょうごん

南無妙法蓮華經をもつて色心を莊嚴したり。この莊嚴と

べつ た とういそくみよう しょうごん

は、別してかざり立てたるにはあらず、当位即妙の莊嚴な

ほんのうそくぼだい しょうじそくねはん うんぬん

り。煩惱即菩提・生死即涅槃これなり云々。

いち けごん だいにち かんぎようとう ほんぷ とくどう こと
一、華嚴・大日・觀經等の凡夫の得道の事

おほ い かね しゆ みなおのおの きようぎよう とくどう
仰せに云わく、彼らの衆、皆各々、その經々の得道に

に しんじつ ほつけ とくどう さん ご
似たれども、眞実には法華の得道なり。いわゆる三・五の

げしゆ やから きよう い しけんがしん もんがしよせつ はじ わ
下種の輩なり。經に云わく「始見我身、聞我所説（始め我

み み わ と き みようらくだいしい だつ
が身を見、我が説くところを聞く）。妙樂大師云わく「脱

げん あ ほんしゆ あ い
は現に在りといえども、つぶさに本種を騰ぐ」と云えり。

ほんしゆ い なんみようほうれんげきよう うんぬん
「本種」と云うは、南無妙法蓮華經これなり云々。

いち だいもく ごじ げしゆ しようもん こと
一、題目の五字をもつて下種の証文となすべき事

おほ い きよう い きようむりようぼさつ ひつきようじゆう
仰せに云わく、經に云わく「教無量菩薩 畢竟住

いちじよう むりよう ぼさつ ひつきよう いちじよう じゆう

一乗（無量の菩薩をして、畢竟して一乗に住せしめん）。

みようらくだいしい よきよう たね むりようぼさつ

妙楽大師云わく「余教をもつて種となさず」。「無量菩薩」

にほんこく いつさいしゆじよう ぼさつ かいえ だいもく おし

とは、日本国の一切衆生を菩薩と開会して題目を教えたり。

ひつきよう だいもく ごじ ひつきよう じゆういちじよう

「畢竟」とは、題目の五字に畢竟するなり。「住一乗」

じようしほうじよう じきしどうじよう ほうじよう じよう ただ

とは、「乗此宝乗 直至道場（この宝乗に乗じて、直ち

どうじよう いた げしゆ お

に道場に至る）、「これなり。下種とは、たねを下ろすなり。

しゆし じようぶつ たね かみ きようもん きようむりようぼさつ

種子とは、成仏の種のことなり。上の経文に「教無量菩薩」

きよう いちじ げしゆ しようもん きよう

の「教」の一字は、下種の証文なり。「教」とは、題目を

ささ とき こんきよう とくどうな ほっけ とくどう

授くる時のことなり。「権教は得道無し、法華のみ得道す」

と教うるを、下種とは云うなり。末法に入つてこの経文を

出ださん人は有るべからざるなり。たしかに塔中相承の

秘文なり。下種の証文、秘すべし、秘すべし云々。

一、題目の五字、末法に限つて持つべきの事

仰せに云わく、経に云わく「悪世末法時 能持是経者

(悪世末法の時、能くこの経を持たば)」。この「経」と

は、題目の五字なり。「能」の一字に心を留めてこれを案ず

べし云々。末代悪世の日本国の一切衆生に持てと云う

経文なり云々。

いち てんたいい
一、天台云わく「これ我が弟子、わ でし まき わ ほう ひろ 応に我が法を弘むべし」の
こと

おほ

い

わ でし

じょうぎようぼさつ

わ

仰せに云わく、「我が弟子」とは、上行菩薩なり。「我

ほう

なんみようほうれんげきよう

ごんきようないししかくとう

ずい

が法」とは、南無妙法蓮華経なり。権教乃至始覚等は、随

たい た ほう 他意なれば「他の法」なり。さて、この題目の五字は、五百

じんてん このかた しょうとく 塵点より已来、証得したまえる法体なり。故に「我が法」

しやく てんたいい みようほうれんげきよう ほんじじん と釈せり。天台云わく「この妙法蓮華経は、本地甚深の

おうぞう さんぜ によらい しょうとく 奥蔵なり。三世の如来の証得したもうところなり」とは、

これなり。

いち しきしん しんぼう い こと
一、色心を心法と云う事

仰せに云わく、玄の十に云わく「請を受けて説く時は、

ただこれ教意を説くのみ。教意はこれ仏意なり。仏意は即

ちこれ仏智なり。仏智至つて深し。この故に三止四請す。

かくのごとき艱難は、余経に比ぶるに、余経は則ち易し

云々。この釈の意分明なり。「教意」と「仏意」と「仏智」

とは、いずれも同じことなり。「教」は二十八品なり、「意」

は題目の五字なり。総じて、「仏意」とは法華経の異名なり。

法華経をもつて一切経の心法とせり。また、題目の五字を

いちだいせつきよう ほんじやくにもん たましい きよう い
もつて、一代説教・本迹二門の神とせり。経に云わく

みようほうれんげきようによらいじゆりようほん

だいもく ごじ

「妙法蓮華経如来寿量品」、これなり。この題目の五字を

さんぜ しょうぶつ みようこん

しよきよう たましい

もつて三世の諸仏の命根とせり。さて、諸経の神も

ほけきよう

しようもん

みようほうれんげきようほうべんほん

だい

法華経なりという証文は、「妙法蓮華経方便品」と題した

うんぬん

る、これなり云々。

いち

むさ

おうじん

われ

ほんぷ

こと

一、無作の応身は我ら凡夫なりという事

おほ

い

しやく

い

ほんぷ

さんじん

ほん

え

仰せに云わく、釈に云わく「凡夫もまた三身の本を得

うんぬん

ほん

じ

おうじん

たり」云々。この「本」の字は、応身のことなり。されば、

ほんじむさ

ほんかく

たい

むさ

おうじん

ほん

本地無作の本覚の体は、無作の応身をもつて本とせり。よ

つて、我ら凡夫なり。応身は物に応う身なり。その上、

じゆりようほん だいもく とな い たてまつ しんじつ おうじんによらい

寿量品の題目を唱え出だし奉るは、真実に応身如来の

じひ うんぬん

慈悲なり云々。

いち しょが しおな こと

一、「諸河に鹹無し」の事

おお い しおな しょきよう

仰せに云わく、この「鹹無し」のことをば、諸教の

むとくどう たと たいかい 鹹 しおな ほけきよう じようぶつ

無得道に譬えたり。大海のしおはやきをば、法華経の成仏

とくどう たと しょきよう いちねんさんぜん ほうもんな しょが

得道に譬えたり。また、諸経に一念三千の法門無きは、諸河

潮 あじな しびと ほけきよう いちねん

にうしおの味無きがごとく、死人のごとし。法華経に一念

さんぜん ほうもんあ たいかい あ

三千の法門有るは、うしおの大海に有るがごとく、生きた

い

ひと

ほけきよう

あき

しん

泡

潮

る人のごとし。法華経を浅く信ずるは、あわのうしおのご

ふか しん

かいすい

き

かいすい

とし。深く信ずるは、海水のごとし。あわは消えやすし、海水

き

によせつしゆぎよう

もつと

たいせつ

は消えざるなり。如説修行、最ももつて大切なり。しか

しよきよう

たいが

ごくじん

たいかい

泡

鹹

りといえども、諸経の大河の極深なるも大海のあわのしお

あじ

ぐそく

ごんきよう

ほとけ

ほけきよう

りそく

ぼんぷ

の味をば具足せず。権経の仏は法華経の理即の凡夫には

ひやくせんまんばいおと

うんぬん

百千万倍劣るなり云々。

いち

みようらくだいし

しゃく

まっぼう

はじ

みようりな

一、妙楽大師の釈に「末法の初め、冥利無きにあらず」の

しゃく

こと

釈の事

おお

い

しゃく

こと

まっぼう

みよう

仰せに云わく、この釈の意は、末法において、冥の

りやく しやつけ しゆ

しやく

やくおうほん

利益、迹化の衆あるべしということなり。この釈は、薬王品

しきようそくい えんぶだいにんびよう しろうやく

にやくにんうびよう

とくもんぜきよう

の「此経即為閻浮提人病之良薬。若人有病、得聞是経、

びようそくしようめつ

ふろうふし

きよう

すなわ

えんぶだい

ひと

病即消滅、不老不死（この経は即ちこれ閻浮提の人の

やまい ろうやく

ひとやまいあ

きよう

き

病の良薬なり。もし人病有らんに、この経を聞くことを

え

やまい

すなわ

しようめつ

ふろうふし

うんぬん

得ば、病は即ち消滅して、不老不死ならん」云々、こ

きようもん

こころ

そこ

ふく

しやく

みようらくい

の経文の意を底に含めて釈せり。妙楽云わく「しかる

のち

ごひやく

いちおう

したが

まっぼう

はじ

みようりな

に後の五百は、しばらく一往に従う。末法の初め、冥利無

だいきよう

るぎよう

とき

よ

ゆえ

きにあらず。しばらく大教の流行すべき時に拠る。故に

ごひやく

い

い

ほんげ

ぼさつ

けん

りやく

しやつけ

五百と云う」と云えり。よって、本化の菩薩は顕の利益、迹化

みよう りやく
は冥の利益なるべし云々。
うんぬん

いち にぜんきよう がりやくこく こと
一、爾前経は瓦礫国の事

おほ い ほけきよう だいさん い によじゆうけ くら
仰せに云わく、法華経の第三に云わく「如従飢国来

こつぐ だいおうぜん う くに きた だいおう ぜん
忽遇大王膳（飢えたる国より来つて、たちまちに大王の膳に

あ うんぬん ろく まき い がし どあん のん てんにん
遇うがごとし）」云々。六の巻に云わく「我此土安穩 天人

じようじゆうまん がじようどふ き わ ど あんのん てんにん つね
常充滿 我浄土不毀（我がこの土は安穩にして、天人は常

じゆうまん わ じようど やぶ うんぬん りようほん もん
に充滿せり。我が浄土は毀れず）」云々。この両品の文の

こころ ぎんきよう がりやく たび くに
意は、権教はことごとく瓦礫の旅の国なり。あやまりて

ほんこく おも みやこ おも まよ ゆえ いちおう しじゆうにねん
本国と思ひ都と思わんこと、迷いの故なり。一往、四十二年

じゅう くに しゅじょう みな ほんごく おも ほんごく

住したる国なれば、衆生は皆、本国と思えり。本国はこ

ほけきょう しんげほん い ぐこうほんごく ほんごく

の法華経なり。信解品に云わく「遇向本国（たまたま本国に

む さん ご げしゅ しょ さ ほんごく じょうど

向かいぬ）。三・五の下種の所を指して、「本国」とも「浄土」

だいおうぜん い げしゅ しんじ すなわ じゅじ

とも「大王膳」とも云うなり。下種の心地は、即ち受持・

しんげ くに うんぬん

信解の国なり云々。

いち むみよう あくしゅ こと

一、無明の悪酒の事

おお い むみよう あくしゅ よ こうぼう

仰せに云わく、無明の悪酒に酔うといふことは、弘法・

じかく ちしようとう ほうねんとう ひとびと むみよう あくしゅ しようもん

慈覚・智証等、法然等の人人なり。無明の悪酒という証文

かんじほん い あつきにゆうごしん あつき み い

は、勸持品に云わく「悪鬼入其身（悪鬼はその身に入る）」、

これなり。悪鬼あつきと悪酒あくしゆとは同じことなり。悪鬼あつきの「鬼き」

だいろくてん

まおう

あくしゆ

むみよう

むみようそくまおう

は第六天の魔王のことなり。悪酒は無明なり。無明即魔王、

まおうそくむみよう

ごしん

しん

にほんこく

ほうぼう

いつさい

魔王即無明なり。「其身」の「身」とは、日本国の謗法の一切

しゆじよう

い

の

おな

あつきい

ひと

衆生なり。入ると吞むとは同じことなり。この悪鬼入る人

あびい

ほけきよう

ぎようじゃ

にゆうぶつちけんどうこ

は阿鼻に入る。さて、法華經の行者は「入仏知見道故

ぶつちけん

どう

い

ゆえ

み

ぶつどう

い

とくにゆう

(仏知見の道に入るが故に)」と見えて、仏道に入る。「得入

むじようどう

むじようどう

い

う

と

あいかま

あい

無上道(無上道に入ることを得)」とも説けり。相構えて相

かま

むみよう

あくしゆ

おそ

うんぬん

構えて、無明の悪酒を恐るべきなり云々。

いち

にちれん

こしよう

こと

一、日蓮の己証の事

おほ

い

じゆりようほん

なんみようほうれんげきよう

仰せに云わく、い 寿量品の南無妙法蓮華經これなり。

じゆせんがい しゆつげん

まつだいとうせい

べつふぞく

みようほうれんげきよう

地涌千界の出現にして、まつだいとうせい 末代当世の別付囑の妙法蓮華經

ごじ

いちえんぶだい

いつさいしゆじよう

と

つ

たも

と

ほとけ

の五字を一閻浮提の一切衆生に取り次ぎ給うべき、ほとけ 仏の

ちよくし

じようぎようぼさつ

うんぬん

と

つ

と

と

と

しゃくそん

勅使の上行菩薩なり云々。取り次ぎとは、しゃくそん 取るとは釈尊

じようぎようぼさつ

て

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

より上行菩薩の手へ取りたもう。さて、じようぎようぼさつ 上行菩薩、ま

まつぼうとうこん

しゆじよう

と

つ

と

と

と

と

と

と

と

と

た末法当今の衆生に取り次ぎたまえり。これを取り次ぐと

い

ひろ

まつぼうばんねん

と

つ

と

つ

つ

と

は云うなり。広くは、まつぼうばんねん 末法万年までの取り次ぎ取り次ぎな

むりようだんぜつ

だんぜつ

と

り。これを「無令断絶（断絶せしむることなかれ）」とは説

けつちよう

ごじ

もう

うんぬん

じようぎようぼさつ

かれたり。また結要の五字とも申すなり云々。上行菩薩

と っ ひほう なんみようほうれんげきよう うんぬん
取り次ぎの秘法は、いわゆる南無妙法蓮華經これなり云々。

いち しゃくそん じごん ひほう こと
一、**釈尊の持言の秘法の事**

おほ い じごん ひほう きようもん じゆりようほん い
仰せに云わく、持言の秘法の經文とは、寿量品に云わ

まいじさせねん みずか ねん な もん
く「每自作是念（つねに自らこの念を作す）」の文これな

まい じ さんぜじようじゆう ぜねん ねん
り。「每」の字は、三世常住なり。「是念」の「念」とは、

ないしよう ぐそく ゆえ じごん
わすれたまわずして内証に具足したまえり。故に持言なり。

ひほう なんみようほうれんげきよう ひ ひ
秘法とは、南無妙法蓮華經これなり。秘すべし、秘すべし

うんぬん
云々。

いち にちれんもんけ だいじ こと
一、**日蓮門家の大事の事**

仰せおほに云いわく、この門家もんけの大事だいじは、涌出品ゆじゆつぽんの前三ぜんさん後三ごさんの

積しやくなり。この積しやく無くなくんば、本化ほんげ・迹化しやつけの不同ふどう、像法付嘱ぞうほうふぞく・

末法付嘱まつぼうふぞく、迹門しやくもん・本門等ほんもんとうの起尽きじん、これ有あるべからず。既すでに

「止し。善男子ぜんなんし（止やみね。善男子ぜんなんしよ）」の「止し」の一字いちじは、日蓮にちれん

門家もんけの大事だいじなり、秘ひすべし、秘ひすべし。総そうじて「止し」の一字いちじ

は、正まさしく日蓮門家にちれんもんけの明鏡みょうきようの中の明鏡なかみょうきようなり。口外こうがいも詮無せんな

し。上行菩薩等じょうぎぼうさつとうを除のぞいては、総そうじて余よの菩薩ぼさつをば、こと

ごとく「止し」の一字いちじをもつて成敗せいばいせり云々うんぬん。

一、日蓮にちれんが弟子でしは臆病おくびようにては叶かなうべからざる事こと

おほい ところ もんどうたいろん とき にぜん しゃくもん
仰せに云わく、この意は、問答対論の時は、爾前・迹門

しゃくそん

もち

おくびよう

の釈尊をも用いるべからざるなり。これは、臆病にては、

しゃくそん

もち

おも

ゆえ

しゃくそん

釈尊を用いまじきかなんと思ふべき故なり。釈尊をさえ

もち

いげ

とうがく

ぼさつ

用いるべからず。いかにいわんや、その以下の等覚の菩薩を

ほうぼう

ひとびと

や、まして謗法の人々においてをや。いわゆる

なんみようほうれんげきよう

だいおんじよう

い

しよきよう

しよしゆう

たいじ

南無妙法蓮華經の大音声を出だして諸經・諸宗を対治す

ぎよう おなんもんどう

ごしんむしよい

なんもんどう

たく

べし。「巧於難問答 其心無所畏 (難問答に巧みにして、

ところ

おそ

な

うんぬん

その心に畏るるところ無し)」とは、これなり云々。

いち

みようほうれんげきよう

ごじ

まなこ

い

こと

一、妙法蓮華經の五字を眼と云う事

仰せに云わく、法華第四に云わく「仏滅度後 能解其義

ぜしよてんにん せけん しげん ほとけめつど のち よ ぎ げ

是諸天人 世間之眼（仏滅度して後に、能くその義を解せ

しよ てん にん せけん まなこ うんぬん きようもん

ば、これ諸の天・人の世間の眼なり」云々。この経文の

こころ ほけきよう にん てん にじよう ぼさつ ほとけ げんもく

意は、法華経は人・天・二乗・菩薩・仏の眼目なり。こ

げんもく ひろ にちれんいちにん まなこ ごげん

の眼目を弘むるは日蓮一人なり。この眼には五眼あり。い

にくげん てんげん えげん ほうげん ぶつげん まなこ 抉

わゆる肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり。この眼をくじり

べつ まなこ い ひと こうぼうだいし

て別の眼を入れたる人あり。いわゆる弘法大師これなり。

ほけきよう いちねんさんぜん そくしんじようぶつ しよぶつ かいげん とど

法華経の一念三千・即身成仏の諸仏の開眼を止めて

しんごんきよう い ほけきよう まなこ くじ ひと

真言経にありと云えり。これあに法華経の眼を抽れる人

に^{まなこ}あらずや。またこの^閉眼をと^塞じふさぐ人あり。いわゆる^{ほう}法
然^{ねんしょうにん}上人これなり。「捨^{しゃへい}閉」の「閉」の^{へい}文字は、^{もんじ}眼を閉ずる
義^ぎにあらずや。

詮^{せん}ずるところ、能^{のうぐ}弘^{ひと}の人に^{やく}約しては、日^{にち}蓮^{れん}等^らの^{たぐ}類い、

「世^せ間^{けん}之^{しげん}眼」なり。所^{しよぐ}弘^{ほう}の^{した}法に^が随^{したが}えば、この^{だいじようきようてん}大乘^{だいじようきようてん}經典^{だいじようきようてん}は

これ^{しよぶつ}諸^{まなこ}仏^{せん}の^{げん}眼^{いちじ}なり。詮^{せん}ずるところ、「眼」の^{いちじ}一字^{いちねんさんぜん}は^{いちじ}一念^{おさ}三千

の^{ほうもん}法^{ろくまんくせんさんびやくはちじゆうしじ}門^{げん}なり。六^{げん}万^{じあらわ}九^み千^み三^{ぼんのうそくぼだい}百^{しようじそく}八^{しようじそく}十^{しようじそく}四^{しようじそく}字^{しようじそく}をこの「眼」の^{いちじ}一字^{おさ}に^{おさ}納

め^{ねはん}たり。この「眼」の^{ねはん}字^{ねはん}頭^{ねはん}れて^{ねはん}見^{ねはん}れば、^{ねはん}煩^{ねはん}惱^{ねはん}即^{ねはん}菩^{ねはん}提^{ねはん}・^{ねはん}生^{ねはん}死^{ねはん}即^{ねはん}

涅^{ねはん}槃^{ねはん}なり。

いま まつぼう い
今、末法に入つて、「眼」とは、いわゆる未曾有の

だいまんだら

ごほんぞん

ほか

げんもくな

うんぬん

大曼荼羅なり。この御本尊より外には眼目無きなり云々。

いち ほけきよう ぎようじゃ すいか ぎようじゃ こと

一、法華經の行者に水火の行者ある事

おほ い そう きよう しん たてまつ ひと すいか

仰せに云わく、総じてこの經を信じ奉る人に、水火

ふどうあ ゆえ ひ ぎようじゃ おお みず

の不同有り。その故は、火のごとき行者は多く、水のごと

ぎようじゃ まれ ひ きよう

き行者は希なり。火のごとしとは、この經のいわれをき

かえん 燃 た たつと しゆしよう おも しん

きて火炎のもえ立つがごとく貴く殊勝に思つて信ずれど

しやうしつ とうぎ だいしんじん み

も、やがて消失す。これは、当座は大信心と見えたれども、

しんじん ともしびき 易

その信心の灯消ゆることやすし。

さて、水のごとき行者と申すは、水は昼夜不退に流る

るなり。少しもやむことなし。そのごとく法華経を信ずる

を水の行者とは云うなり云々。

一、女人と妙と釈尊と一体の事

仰せに云わく、女人は子を出生す。この出生の子、

また子を出生す。かくのごとく展転して無数の子を

出生せり。この出生の子に、善子もあり悪子もあり、

端嚴美麗の子もあり醜陋の子もあり、長のひくき子もあり

大いなる子もあり、男子もあり女子もあり云々。

せん

みよう

いちじ

ばんぼう

しゅつしょう

じごく

詮ずるところ、妙の一字より万法は出生せり。地獄

がき

ないしぶつかい

ごんきよう

じつきよう

もあり餓鬼もあり乃至仏界もあり、権教もあり実教もあ

ぜん

あく

しよほう

しゅつしょう

うんぬん

り、善もあり悪もあり、諸法を出生せり云々。

しやかいちぶつ

おんみ

いっさい

ぶつぼさつとう

また、釈迦一仏の御身より一切の仏菩薩等ことごとく

しゅつしょう

あみだ

やくし

だいにちとう

しやくそん

出生せり。阿弥陀・薬師・大日等は、ことごとく釈尊の

いちげつ

ばんすい

う

ばんえい

によにん

一月より万水に浮かぶところの万影なり。しかれば、女人と

みよう

しやくそん

みつ

まった

ふどうな

みようらくだいしい

妙と釈尊との三つ全く不同無きなり。妙楽大師云わく

みよう

すなわ

さんぜん

さんぜん

すなわ

ほう

うんぬん

だいばほん

い

「妙は即ち三千、三千は即ち法なり」云々。提婆品に云

ういちほうしゅ

けじきさんぜんだいせんせかい

ひと

ほうしゅ

あたいさんぜん

わく「有一宝珠、価直三千大千世界（一つの宝珠の、価直三千

だいせんせかい

あ

うんぬん

大千世界なるもの有り」とは、これなり云々。

いち

ち ふかしやく

お

かしやく

もん

こと

一、「置不呵責（置いて呵責せず）」の文の事

おお

い

きようもん

にちれんら

たぐ

仰せに云わく、この経文においては日蓮等の類いの

恐

もんじいちじ

あ

もんじ

おそ

おそるべき文字一字これ有り。もしこの文字を恐れずんば、

とうぎ

じ

みらいむけん

ごう

たとい当座は事なしとも、未来無間の業たるべし。しかれ

むけんじごく

ひ

い ごくそつ

ち

いちじ

ば、無間地獄へ引き入る獄卒なるべし。それは「置」の一字

ち いちじ

ごくそつ

ほうぼうふしん

これなり。この「置」の一字は、獄卒なるべし。謗法不信の

とが

み

き

い

お

かなら

失を、見ながら、聞きながら、云わずして置かんは、必ず

むけんじごく

だざい

ち

いちじ

ごくそつ

あぼう

無間地獄へ墮在すべし。よつて、「置」の一字、獄卒・阿防

らせつ

おそ

ち

いちじ

羅刹なるべし。もつとももつて恐るべきは、「置」の一字な

うんぬん

り云々。

せん

きようもん

うち

ごくそつ

いちじ

おそ

詮ずるところ、この經文の内に獄卒の一字を恐るべき

うんぬん

ごくそつ

いちじ

ふか

おも

にちれん

なり云々。この獄卒の一字、深くこれを思うべし。日蓮は、

じ

おそ

ゆえ

けんちようごねん

いまこうあんねんちゆう

この字を恐るるが故に、建長五年より今弘安年中まで、

ざいざいしよしよ

もう

張

ごくそつ

のが

在々所々にて申しはりしなり。ただひとえに、この獄卒を脱

ほけきよう

にやくにんふしん

ひとしん

れんがためなり。法華經には「若人不信（もし人信ぜずし

しろうぎふしんしゃ

うたが

しろう

しん

て）とも、「生疑不信者（疑いを生じて信ぜずんば）」

と

ほけきよう

もんもんくく

ねはんぎよう

とも説きたまえり。法華經の文々句々をひらき、涅槃經の

もんもんくく

文々句々をひらきたりとも、置おいていわずんば叶かなうべから

ち いちじ

ほか ごくそつ な

うんぬん

ざるなり。この「置」の一字より外に獄卒は無きなり云々。

いち いねんな りょうぜんじょうど まい こと

一、異念無く靈山浄土へ参るべき事

おほ

い

いねん

ふしん

わ

こころ

仰せに云わく、異念とは、不信のことなり。もし我が心

ふしん

こころしゅつたい

しんじん

じゅう

なりとも不信の意出来せば、たちまちに信心に住すべし。

せん

ふしん

こころ

し

しんじん

こころ

詮ずるところ、不信の心をば師となすべからず。信心の心

ししやう

じやうしんしんぎやう

ほけきやう

しゆぎやう

たてまつ

を師匠とすべし。淨心信敬に法華経を修行し奉るべき

のうじぜきやう

よ

きやう

たも

のうせつしきやう

なり。されば、「能持是経（能くこの経を持つ）」「能説此経

よ

きやう

と

と

のう

じ

と

（能くこの経を説く）と説いて、「能」の字を説かせたま

りょうぜん

えり。靈山ここにあり。「四土は一念にして、皆常寂光な

しど いちねん

みなじょうじやつこう

り」とは、これなり云々。

うんぬん

いち ふかしつほんしん ほんしん うしな

こと

一、「不可失本心（本心を失うべからず）」の事

おおい ほんしん

ほけきよう しんじん

仰せに云わく、この「本心」というは、法華經の信心の

しつ もう ほうぼう ひと 賺

ことなり。「失」と申すは、謗法の人にすかされて法華經を

す こころ しゅつたい てんだいだいしい

捨つる心の出来するを云うなり。されば、天台大師云わ

あくゆう あ すなわ ほんしん うしな うんぬん

く「もし悪友に値わば則ち本心を失う」云々。この釈に、

あくゆう ほうぼう ひと ほんしん ほけきよう

「悪友」とは謗法の人のことなり、「本心」とは法華經なり。

ほけきよう ほんしん い こころ しょうじつそう おんきよう

法華經を「本心」と云う意は、諸法実相の御經なれ

じつかい しゆじよう しんぽう ほけきよう もう

ば、十界の衆生の心法を法華経とは申すなり。しかるに、

ほんしん ひ めいもう ほう じゃく ゆえ ほんしん

この本心を引きかえて、迷妄の法に著するが故に、本心を

うしな ほんしん さん ご げしゆ ほうもん

失うなり。この本心においては三・五の下種の法門なり。

ぜんゆう あ とき うしな ほんしん

もし善友に値う時んば、失うところの本心をたちまちに

けんとく かしよう しやりほつとう ぜんゆう

見得するなり。いわゆる迦葉・舍利弗等これなり。善友と

しゃかによらい あくゆう だいろくてん まおう げどう ばらもん

は釈迦如来、悪友とは第六天の魔王・外道・婆羅門これな

り。

せん まっぼう い ほんしん にちれんぐつう

詮ずるところ、末法に入つて、「本心」とは、日蓮弘通

なんみようほうれんげきよう あくゆう ほうねん こうぼう じかく

の南無妙法蓮華経これなり。悪友とは、法然・弘法・慈覚・

ちしようとう

だいもく

ほんしん

うしな

智証等これなり。もしこの題目の本心を失わんにおいては、

さん

ご

じんてん

ふ

によぜてんでん

しむしゅこう

また三・五の塵点を経べきなり。ただ「如是展転 至無数劫

てんでん

むしゅこう

いた

しつ

(かくのごとく展転して、無数劫に至らん)なるべし。「失」

むみよう

さけ

よ

ほんしん

うしな

とは、無明の酒に酔いたることなり。よつて、本心を失う

い

よ

醒

ごんきよう

す

と云うなり。この酔いをさますとは、権教を捨てしむるを

うんぬん

い
うなり云々。

いち

てんださいし

まおう

しょうげ

こと

一、天台大師を魔王の障礙せし事

おお

い

ずいぶん

ひぞう

ゆえ

仰せに云わく、このことは随分の秘蔵なり。その故は、

てんださいし

いっしんさんがん

いちねんさんぜん

かんぼう

と

あらわ

天台大師、一心三觀・一念三千の觀法を説き顕さんとした

まいしかば、父母左右の膝に住して悩まし奉り、障礙し
たまいしなり。これ即ち、第六天の魔王が父母の形を現じ
て障礙せしなり。終に魔王に障礙せられたまわずして、
摩訶止觀の法門起これり。

いかにいわんや、今、日蓮が弘むる南無妙法蓮華經は、

三世の諸仏の成道の師、十方薩埵の得道の師匠たり。その

上、正像二千年の仏法は爾前・迹門なれば、魔王自身障礙

をなさずともなるべし。今、末法の時は、所弘の法は法華經

本門の事の一念三千の南無妙法蓮華經なり。能弘の導師は

ほんげじゆ だいぼさつ

まおう

本化地涌の大菩薩にてましますべし。しかるあいだ、魔王

じしんくだ

しょうげ

かな

じしん

自身下つて障礙せずんば叶うべからざるなり。よつて、自身

お

ふんみよう

どうりゆう

りようかん

さいみようじとう

下りたること分明なり。いわゆる道隆・良観・最明寺等

しよてんぜんじんとう

にちれん

ちから

あ

これなり。しかりといえども、諸天善神等は日蓮に力を合

ゆえ

たつ

くち

勝

ほか

だいなん

のが

おせたもう故に、竜の口までもかちぬ。その外の大難をも脱

いま

まおう

懲

そうろう

れたり。今は魔王もこりてや候らん。

にちれんしきよ

のち

ざんとう

いくさ

お

ゆえ

日蓮死去の後は、残党ども軍を起こすべきか。故に、

らっこ

かな

ゆえ

だいろくてん

まおう

それも落居は叶うべからざるなり。その故は、第六天の魔王

けんぞく

にほんこく

しじゆうくおくくまんしせんはつびやくにじゆうはちにん

の眷属、日本国に四十九億九万四千八百二十八人なりしが、

いま にちれん こうさん

たぶん

きよう

い

あつきにゆう

今は日蓮に降参したること多分なり。経に云わく「悪鬼入

ごしん あつき

み い

かつせん

其身（悪鬼はその身に入る）」とは、これなり。この合戦の

お せん

なんみようほうれんげきよう

起こりも、詮ずるところ、南無妙法蓮華経なり。

まおう

たい

まおう

ゆう

まおう

たい

まおう

魔王において、体の魔王、用の魔王あり。体の魔王と

ほつしようどうぐ

まおう

みようほう

ほう

ゆう

まおう

は、法性同共の魔王なり。妙法の法これなり。用の魔王と

しゅつしよう

だいろくてん

まおう

ゆう

まおう

しようげ

は、これより出生する第六天の魔王なり。用の魔王は障礙

たいゆうどうぐ

しよほうじつそう

いちり

ゆい

をなす。しかれども、体用同共の諸法実相の一理なり。「唯

ういちもん

いちもん

あ

ちえ

もん

い

むみよう

ほつしよう

有一門（ただ一門のみ有り）」の智慧の門に入り、無明・法性

いったい

うんぬん

まかしかん

だいじ

ほうもん

は一体なるべきなり云々。いわゆる、摩訶止観の大事の法門

これなり。法華經の一代説教に勝れたるはこの故なり。
ほけきよう いちだいせつきよう すぐ ゆえ

一念三千とはこれなり。法華經第三に云わく「魔及魔民、皆
いちねんさんぜん ほけきようだいさん い まぎゆうまみん かい

護仏法（魔および魔民、皆仏法を護らん）云々。
ごぶつぽう ま まみん みなぶつぽう まも うんぬん

一、法華經の極理の事

仰せに云わく、迹門には二乗作仏、本門には久遠実成、
おほ い しゃくもん にじようさぶつ ほんもん くおんじつじよう

これをさして極理と云うなり。ただし、これもいまだ極理に
ごくり い

たらず。迹門にして「極理」の文は、「諸仏智慧甚深無量
しゃくもん しゃくもん もん しょぶつち えじんじんむりよう

（諸仏の智慧は甚深無量なり）」の文これなり。その故は、
しょぶつ ちえ じんじんむりよう もん ゆえ

この文を受けて文句の三に云わく「豎に如理の底に徹り、横
もん う もんぐ さん い たて により そこ とお よこ

ほうかい へん きわ しゃく
に法界の辺を窮む」と釈せり。さて、本門の極理ほんもん ごくりというは、

によらいひみつ じんずうしりき もん
「如来秘密・神通之力」の文これなり。

せん ちちれん こころ い ほけきよう ごくり
詮ずるところ、日蓮が意に云わく、法華經の極理とは、

なんみようほうれんげきよう いっさい くどく ほうもん しゃくそん いんぎよう
南無妙法蓮華經これなり。一切の功德の法門、釈尊の因行

かどく にほう さんぜじつぼう しょぶつ しゆいんかんか ほけきよう もんもんくく
果徳の二法、三世十方の諸仏の修因感果、法華經の文々句々

くどく と あつ なんみようほうれんげきよう な
の功德を取り聚めて、この南無妙法蓮華經と成したまえり。

しゃく い そう いっきよう けつ
ここをもつて、釈に云わく「総じて一經を結するに、た

よつ すうへい と じゆよ うんぬん
だ四つあるのみ。その枢柄を撮つて、これを授与す」云々。

じようぎようぼさつ じゆよ だいまく ほか ほけきよう ごくり
上行菩薩に授与したもう題目の外に、法華經の極理はこ

れ無なきなり云々。
うんぬん

いち みようほうれんげきよう ごじ くら こと

一、妙法蓮華經の五字の蔵の事

おほ い ころろ みようほう ごじ なか いちねん

仰せに云わく、この意は妙法の五字の中には一念

さんぜん ほうしゆ ごじ くら さだ てんだいだいし げんぎ いち ほん

三千の宝珠あり。五字を蔵と定む。天台大師、玄義の一に判

みようほうれんげきよう ほんじじんじん おうぞう

ぜり。いわゆる「この妙法蓮華經は、本地甚深の奥蔵なり」

うんぬん ほけきよう だいいし い ぜ ほけきようぞう ほけきよう くら

云々。法華經の第四に云わく「是法華經蔵（この法華經の蔵）」

うんぬん みよう げこん ほう あごん れん ほうどう げ ほんにや きよう ねはん

云々。妙〈華嚴〉法〈阿含〉蓮〈方等〉華〈般若〉經〈涅槃〉、

い みよう ねはん ほう ほんにや れん ほうどう げ あごん

また云わく、妙〈涅槃〉法〈般若〉蓮〈方等〉華〈阿含〉

きよう げこん いじよう みようほうれんげきよう ごじ じっかいさんぜん ほうしゆ

經〈華嚴〉、已上、妙法蓮華經の五字には、十界三千の宝珠

あり。三世の諸仏は、この五字の蔵の中より、あるいは華嚴せんげの宝を取り出だし、あるいは阿含・方等・般若の宝を取り出だし、種々説法したまえり。しかのみならず、論師・人師等らの疏釈も、ことごとくこの五字の中より取り出だして一切衆生に与えたまえり。

これらは皆、五字の中より取り出だしたまえども、

妙法蓮華經の袋をば持ちたまわず。詮ずるところ、五字は

上行菩薩の付嘱にして、さらに迹化の菩薩・諸論師いろわ

ざる題目なり。よつて、上行所伝の南無妙法蓮華經は蔵な

こんごう ふえ ふくろ ふくろ にほんこく いっさい

り、金剛不壞の袋なり。この袋をそのまま日本国の一切

しゅじょう あた しんじん ざいほう う と

衆生には与えたまえり。信心をもつてこの財宝を受け取る

いま まっぼう い にちれんら たぐ う と

べきなり。今、末法に入つては、日蓮等の類い、受け取る

によいほうしゅ うんぬん

ところの如意宝珠なり云々。

いち われ しゅじゅ じょうぶつ う じょうぶつ しょうもん

一、我ら衆生の成仏は打ちかためたる成仏という証文の

事

おお い きょう い むじょうほうしゅ ふぐじとく むじょう

仰せに云わく、経に云わく「無上宝聚 不求自得（無上

ほうしゅ もと おの え もん われ

の宝聚は、求めざるに自ずから得たり）」の文これなり。我

ぼんぷそくごく う 固 じょうぶつ

ら凡夫即極と、はたと打ちかためたる成仏なり。いわゆる

ふぐじとく

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

不求自得するところの南無妙法蓮華経なればなり云々。

いち にぜん ほっけ のう こと

一、爾前・法華の能くらべの事

おほ い にぜん きよう じゆうあく ごぎやくとう じようぶつ

仰せに云わく、爾前の経にして十悪・五逆等の成仏

のう いま ほけきよう じつかいがいじよう ふんみよう にぜん きよう

の能なし。今、法華経に、十界皆成、分明なり。爾前の経

むのう しょうもん ほうべんぼん い たん い けみようじ

の無能という証文とは、方便品に云わく「但以仮名字

いんどう おしゆじよう かり みようじ しゆじよう いんどう

引導於衆生（ただ仮の名字をもつて、衆生を引導したも

もん ほん ほけきよう のう しょうもん

うのみ）の文これなり。さて、法華経は能という証文は、

しよほうじつそう もん いま まっぼう い だいいち のう

「諸法実相」の文これなり。今、末法に入つて、第一の能た

なんみようほうれんげきよう うんぬん

る南無妙法蓮華経これなり云々。

いち じゆしき ほつたい こと

一、授職の法体の事

おほ い もん ゆいぶつよぶつ ほとけ ほとけ

仰せに云わく、この文は「唯仏与仏（ただ仏と仏と

ひもん い ほうもん じっかい

のみ）の秘文なり。たやすく云うべからざる法門なり。十界

さんぜん しょうほう いちごん じゆしき ひもん

三千の諸法を一言をもつて授職するところの秘文なり。そ

もん じんりきほん い かいおしきょうせんじけんぜつ みな きょう

の文とは、神力品に云わく「皆於此經宣示顯説（皆この經

せんじけんぜつ もん ごじ すなわ じっかい

において宣示顯説す）の文これなり。この五字、即ち十界

どうじ じゆしき ひもん じっかいここ とうたい ほんぬ

同時に授職するところの秘文なり。十界己々の当体は、本有

みょうほうれんげきょう じゆしき ひもん うんぬん

の妙法蓮華経なりと授職したる秘文なり云々。

いち まっだい ゆず じょう こと

一、末代の譲り状の事

仰せおほに云いわく、末代まつだいとは、末法まつぼう五百年ごひやくねんなり。譲り状ゆず じようと

てつ しょうもん なんみようほうれんげきよう

は、手継ぎてつの証文しょうもんたる南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようこれなり。これを譲ゆず

ふた ぎ あ いち あと に たから

るに、二つの義ぎこれ有り。一には跡あをゆずり、二には宝たからを

いち あと ゆず しゃかによらい あと ほけきよう

ゆずるなり。一に跡あを譲ゆずるとは、釈迦如来しゃかによらいの跡あとを法華經ほけきようの

ぎようじや しょうもん い によがとうむい

行者ぎようじやにゆずりたまえり。その証文しょうもんに云わく「如我等無異によがとうむい

わ むつ じやもん

(我がごとく等むつしくして異なることじやもんなからしめん)の文もんこ

つぎ ざいほう しゃくそん ちえ かいとく

れなり。次に財宝ざいほうをゆずるといしゃくそんうは、釈尊しゃくそんの智慧ちえ・戒徳かいとくを

ほけきよう ぎようじや しょうもん い むじよう

法華經ほけきようの行者ぎようじやにゆずりたまえり。その証文しょうもんに云わく「無上むじよう

ほうじゆ ふ ぐ じとく むじよう ほうしゆ もと おの え

宝聚ほうじゆ 不求自得ふ ぐ じとく (無上むじようの宝聚ほうじゆは、求めざるもとに自ずおのから得たえ

り)」の文これなり云々。さて、この題目の五字は譲り状な

り云々。

一、本有の止観という事

仰せに云わく、本有の止観というは、大通をもつて習う

なり。久遠実成道の仏と大通智勝仏と釈尊との三仏

を、次のごとく仏法僧の三宝と習うなり。この故に、大通は

本有の止観なれば、即ち三世の諸仏の師範と定めたり。よ

つて、大通仏を法と習う。この法は妙法蓮華經これなり。

よつて、証文に云わく「大通智勝仏 十劫坐道場

だいじゅうりちしやうぶつ

じつじやうどうじやう

ぎ

もん

(大通智勝仏は、十劫道場に坐したもう)の文これなり。

じつこう

じつかい

うんぬん

十劫は即ち十界なり云々。

いち

まつぼう

い

しぐせいがん

こと

一、末法に入つての四弘誓願の事

おお

い

しぐせいがん

いちもん

くでん

仰せに云わく、四弘誓願をば、一文に口伝せり。その

いちもん

じんりきほん

い

おがめつどご

おうじゆじ

一文とは、いわゆる、神力品に云わく「於我滅度後 応受持

しきよう

ぜにんおぶつどう

けつじようむうぎ

われめつど

のち

斯経 是人於仏道 決定無有疑 (我滅度して後において、

まさ

きよう

じゆじ

ひと

ぶつどう

けつじよう

応にこの経を受持すべし。この人は仏道において、決定し

うたが

うんぬん

きようもん

ほけきよう

じよほん

て疑いあることなけん)云々。この経文は、法華経の序品

はじ

しぐせいがん

ほうもん

と

お

じようぎよう

より始めて四弘誓願の法門を説き終わつて、さて、上行

ぼさつ みようほうれんげきよう ふぞく とき みようほう ごじ しぐ

菩薩に妙法蓮華経を付嘱したもう時、妙法の五字に四弘

せいがん むす けつく と めつご まっぽう

誓願を結んで結句に説かせたまえり。「滅後」とは、末法の

はじ ごひやくねん しゅじようむへんせいがんど ぜにん

始めの五百年なり。衆生無辺誓願度というは、「是人」の

にん じ せいがん じゆ ほんげ じようぎようぼさつ せいがん い

「人」の字なり。誓願は地涌の本化の上行菩薩の誓願に入

すなわ ぶつどう に じ どだつ ほんのうむへん

らんと、これ即ち「仏道」の二字、度脱なり。煩惱無辺な

ほんのうそくぼだい しようじそくねはん たいだつ ぶつどう い

れども、煩惱即菩提・生死即涅槃と体達す。仏道に入つて

ほんのう じゆじしきよう しょ ほうもんむじんせいがんち

は煩惱さらになし。「受持斯経」の所には、法門無尽誓願知、

ふんみよう むじようぼだいせいがんししよう ぜにん おぶつどう けつじよう

分明なり。無上菩提誓願証というは、「是人於仏道 決定

む うぎ さいだ し ぐせいがんふんみよう きようしゆしやくそん まっぽう

無有疑」と定めたる四弘誓願分明なり。教主釈尊の末法

い に入つての四弘誓願もこの文なり。もん 上行菩薩の四弘誓願

もん もこの文なり。深くこれを思案すべし云々。しあん うんぬん

いち しぐせいがん おう ほう ち り こと 一、四弘誓願の応・報・智・理という事

おお い 仰せに云わく、衆生無辺誓願度は応身なり、煩惱無辺

せいがん ほうしん ほうもんむじんせいがんち ちほつしん せいがんだん 誓願断は報身なり、法門無尽誓願知は智法身なり、無上菩提

せいがんしょう りほつしん 誓願証は理法身なり。

せん 詮ずるところ、誓願というは、題目弘通の誓願なり。釈

い にかれ くに云わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」

うんぬん とは、これなり云々。

いち ほんらい しぐ こと

一、本来の四弘の事

おほ い しょうほう どうたい ほんらい しぐ ゆえ

仰せに云わく、諸法の当体、本来四弘なり。その故は、

しゅじょう ほうかい せん ほうかい り ち じひ

衆生というは法界なり。詮ずるところ、法界に理・智・慈悲

みつ ぐそく おう ほう ほう さんじん しょうほう じたい むさ

の三つを具足せり。応・報・法の三身、諸法の自体なり。無作

おうじん しゅじょうむへんせいがんどう むさ ほうしん

の応身をもつて衆生無辺誓願度というなり。無作の報身に

ちとく だんとく にとく そな ほんのうむへんせいがんなん

は智徳・断徳の二徳を備えたり。煩惱無辺誓願断をもつて

ほんぬ だんとく さだ ほうもんむじんせいがんち ほんぬ

本有の断徳とは定めたり。法門無尽誓願知をもつて本有の

ちとく むじょうぼだいせいがんしょう むさ ほっしん

智徳とす。無上菩提誓願証をもつて無作の法身というなり。

せん しぐせいがん なか しゅじょうむへんせいがんどう

詮ずるところ、四弘誓願の中には衆生無辺誓願度をもつて

かんよう

いま にちれんら たぐ

なんみようほうれんげきよう

肝要とするなり。今、日蓮等の類いは、南無妙法蓮華経を

しゆじよう ど

ほか しよせん

そく

もつて衆生を度する、これより外は所詮なきなり。「速

じようじゆぶつしん

すみ

ぶつしん

じようじゆ

うんぬん

せん

成就仏身（速やかに仏身を成就す）「これなり云々。詮ず

しぐせいがん

いちねんさんぜん

るところ、四弘誓願は一念三千なり。

しぐ

なにも

じようぎようしよでん

さて、四弘の弘とは何物ぞ。いわゆる、上行所伝の

なんみようほうれんげきよう

しやく

い

しぐ

のう

しよ

ほろ

南無妙法蓮華経なり。釈に云わく「四弘、能も所も泯ぶ」

うんぬん

しやく

しかん

さき

さんぎよう

しやく

のう

云々。この釈は止観に前の三教を釈せり。「能」という

によらい

しよ

しゆじよう

のうしよかくべつ

ごんぎよう

は如来なり、「所」とは衆生なり。能所各別するは権教の

ゆえ

ほげきよう

こころ

のうしよいつたい

ほろ

故なり。法華経の心は能所一体なり。「泯ぶ」というは、

権教ごんきょうの心こころは機き・法共ほうともに一同いちどうなれば、のう「能のうも所しよも泯ほろぶ」と云いうなり。じょうぶつあえて能所じょうぶつ一同いちどうして成仏じょうぶつするところを「泯ほろぶ」と云いうにはあらざるなり。いま今いま、末法まつぽうに入いつて、ほけきょう法華經ほけきょうの行者ぎやうじやは四弘能所感応しぐのうしよかんのうの即身成仏そくしんじょうぶつの四弘しぐなり云々うんぬん。

おんこうききがき しゅう
御講聞書 終